
僕は巻き込まれた一般人

setshow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は巻き込まれた一般人

【Nコード】

N6022R

【作者名】

setshow

【あらすじ】

僕の名前は青羽 瞬。勇者召喚に巻き込まれた極普通の一般人である。

召喚魔法の失敗によって殺されてしまい、幽霊？をやっています。勇者達を生暖かく観察しながら過ごす日々を目標に、まったりと存在する予定が？

只今、異界建国ルート爆進中。

*注意 この作品本文に主人公の本名は決して明かされません。

1 召喚

「ちょっと！どきなさいよ！」

切っ掛けは見栄と打算だった。

自分と同じ学校の制服を着た少女達が、柄の悪いお兄さん達に絡まれていた。

それが我が校一の美少女にして、学業優秀、実家が古武術道場の黒髪ロング、クールビューティで清楚な大和撫子の黄蓮寺朋美さんおうれんじ ともみと自分と同じクラスメイトのスポーツ系美少女で剣道道場の跡取り娘のポニーテールの活発な少女、赤瀬明菜さんあかせ あきなならば見栄をはって顔を覚えて貰うのも悪くは無い。

そんな見栄と打算に満ちた正義感で柄の悪い人達に割って入った。

2

普段はこんな真似はしない。

都会の流儀として見て見ぬ振りをするだけだ。

第一、武道をしている彼女達には余計なお世話だろう。

「あゝすみません。彼女達に急ぎの用事があるので連れて行きますね」

五人の男達の輪に入って今にも踊りかかりそうな赤瀬さんと冷静に相手を観察して奥に引っ込んでいた黄蓮寺さんの手を取る。

「なんだ？おめえは？」

「すみません！ちょっと通してください！急ぎなんです」

俺は申し訳なさそうな顔をしながら無理やり男達の間を通る。

気が強い赤瀬さんは戦いたかったのか不満そうな顔をして、才色兼備で空気の読める黄蓮寺さんは僕の意図を読み取って男達を刺激しないようについて来てくれた。

大抵のナンパならこれで終わるはずであった。

「てめえふざけんなよ」

どうやら性質たちの悪い方達のように素直に離れさせてくれそうに無かった。

僕は盛大に溜息をつくと彼女達を後ろに庇う。

怪我、もしくは死ぬことになるかも

生涯一度として喧嘩などしたことのない僕が、決死の決意を浮かべて男達と対峙した。

「君達。大丈夫かい？」

横合いから光り輝く美少年が声を掛けてきた。

彼は白峰光しらみねひかる、俺と同じ学年の有名人で県内でファンクラブがあるほどのモテ男だ。

容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能、博愛精神旺盛の彼は、悪癖として女達を手折る名手でもある。

事実、学校中の少女達と付き合いハーレムを形成している忌避す

べきヤリチン野郎で、男達の怨嗟の的、男女比を狂わせる悪魔、もてない男達の不倶戴天の敵、近寄るだけで吐き気がする。

後ろの二人は自分を救ってくれる勇者が現れたように恋する乙女の瞳で彼から視線を外そうとしない。

助かったことは確かだけど全部持つてかれて納得がいかない。

美形なだけでこの扱い、嫉妬の炎で焼身自殺しそうだ。

男達も自分達の敵を白峰光と見定めて配置を換え直している。

「ちよつとお兄さん達いいかい？」

男達と大差なさそうな柄の悪い顔つきをした少年が最後尾の男に肩をおいて声を掛けたのが目に入った。

少年は無言を言わず男を殴りつけると他の男達との乱闘に持ち込んだ。

それに呼応して横にいた白峰光も乱闘に加わりあっという間に男達を伸ばしてしまう。

「おぼえてやがれ！」

ありきたりな台詞を吐いて男達が逃げていくと白峰光が最初に乱闘した少年に笑い掛けていた。

少年の名は黒淵夜彦、白峰よりも二枚目だが野卑で精悍な顔立ちで校内一の問題児、白峰と仲が良く、親友らしい。

問題児とされているのも遅刻早退が多く、先生に喧嘩を売ったり、怪しい人たちとの知り合いが多いされていて、危ないバイトもしているらしい。しかし、不思議とクスリや暴行などの犯罪の噂が無い。彼の後ろ暗い過去や闇を抱えているところが受けるらしくてコア

なファンが多い。

彼と白峰光で学校の八割の女性を落としている学校男子の敵だ。

笑い合っている白峰等に彼女達がお礼を云っている。

みんな僕の存在をすっかり忘れていているようだ。

赤瀬明菜さんが黒淵弥彦に抱きつかんばかりに食って掛かっている。

傍目から見ても赤瀬さんが黒淵に好意があってツンデレしているらしい。

黄蓮寺さんが白峰に礼を伝えて、親しく話をしている。

黄蓮寺朋美さんと白峰光が幼馴染で付き合っている噂は本当なのだろうか？

学校のたわいの無い噂話を思い出してチクリと胸を刺した。

煙の無いところに火は立たない。

認めたくないことだが、それが本当なら美男美女のカップルで、すでにヤっているはずだ。

話が弾んでいるのか彼女が笑っている様子を見ると、居た堪れなくなつて、その場を去ろうと踵を返す。

唐突に光る紋様が目の前に現れた。

「うおっ」

黒淵も気づいたのか背後で彼の声が聞こえた。

「なにつ」

「えっ」

「なんなの？」

黒淵の上げた声に周囲の状況に気づいたのか、赤瀬さん達の驚きの声上がる。

首を突き抜けて広がっている紋様を気にしつつ背後を振り返ると、白峰光を中心に球形の紋様がドームのように取り囲んでいるのが目に入った。

それは偶然にして必然なり

僕はこのとき誤った選択をしていた。

回れ右をしてその場で振り向かず、後ろに一步下がってから振り向くか、一步進んで紋様を突き抜けてから振り返れば良かったのだ。

どうやら球形紋様は白峰に用が有るらしい。

物語の主役に巻き込まれた脇役でしかないと思いきらされる。

球形紋様の中心に黒い点が発生すると凄い勢いで広がり。

僕はトラックに撥ねられた時のように身体が固まって動けずに飲み込まれた。

気がつくところはお椀の中のような半球状の場所であった。

下側に半球形をしているその内壁には先程ドーム状に展開していた紋様が刻み込まれている。

僕らはその半球状魔方陣の中空に放り出された。

人の腰ぐらいの位置から落とされたのだが、僕以外のみんなは運動神経がいいのか、問題なく着地していく。

底の面が球状になっているため全員が自然と中央にいる白峰に集まる。

……さすが主人公、何もしなくても女の子から寄って来る。

僕が嫉妬に駆られていると、黒淵が周囲をせわしなく警戒して、足にはねを溜めていつでも飛びのけるようにした。

原因はお椀の縁からこちらを狙っている弓兵のせいだ。

二メートルぐらいの高さの縁から矢尻で此方を狙っていて、後ろには槍の穂先も見える。

白峰達も四方から狙われている其れに気がついたのか身を硬くした。

黒淵と僕以外は白峰に守られるように固まっているけど、バラけないと良いのだと思うのは気のせいではなかるか。

もしかしたら彼女達は白峰をあえて盾にするために計算して固ま

っているのかもしれない。
だとしたら女性不信になりそうなくらい恐ろしいことだ。

馬鹿なことを考えていると半球の縁に白い儀式服を着た青髪の少女が現れた。

少女の年齢は僕達と同じぐらいで白峰の顔を見つめて惚け出した。

多分、巫女を担った人なんだろうけど、早速、腐れ野郎の餌食になっちゃったらしい。

白峰に対する嫉妬とイケメン好きの女達への嫌悪が増してくる。

少女の脇から金属鎧を付けた男達が出てきて木製の梯子を僕達の元にまで掛けた。

これは上がってこいという事なのだろうか？

自分の役割を忘れている色惚け女に白峰以外の僕達は厭きれていると、少女の後ろから誰かの声が聞こえて来て少女を正気に戻した。少女は取り繕うように慌てた様子で僕達に声を掛けてきた。

「コチラニキテクダサイ」

……なぜ片言なのだろうか？

疑問に思いながらもその言葉に従って白峰から順に梯子を昇って行く。

最後に僕が上がるとそこは大きめの部屋に神官の格好をした人やら騎士の格好をした人やらでギッシリと人が集まっていた。

僕だけが余りの人の多さに気後れしていると先程の青髪の少女が

綺麗な布の上に大型犬用の首輪を捧げ持って近づいてきた。

……まさかと思うけどアレを付けると？

「コレヲツケテクダサイ」

正解だったらしい。

大勢の奇異の視線にも動じていなかった白峰達も顔を引きつらせる。

……結局、熾烈な目配せ合戦に敗れた白峰が付けることになった。

項垂れた白峰が首輪を付けると青髪の少女が聴きなれない言葉で話しかけている。その言葉に白峰が驚いて知らない言葉で返答しているの、あの首輪は翻訳機なのだろう。

どうもそれだけじゃないような気がするが、文化の違いと製作者の趣味と言えば其れまでである。

話が一段落したのか白峰が此方に向けて説明してくれた。

まず、僕達は魔王を倒すための勇者として召喚されたこと。そして、魔王を倒した後を送還する準備があるとのこと。

この翻訳の首輪は複数の人間が召喚されると考えられておらず、一つしか用意していないので早急に手配するとのこと。

先程喋った片言言葉は古代神聖語なので、その言葉以外は覚えておらず日本語は喋れないとのこと。

首輪が手配されるまで白峰が仲介することになる。

どうも白峰が首輪を付けてからの周囲いる人達の馬鹿にした目付きを見る限り、向こうは腹に一物を持っているようだ。

もしかしたら送還するつもりなんか此れっぽっちも無くて首輪にも何かしらの仕掛けが施されているのかもしれない。

黒淵も僕と同じことを思ったのか、眉間に皺を寄せて鋭い目付きで何かを考えながら見回している。まるで周囲の人間の武量を見極めているようだ。

考えてみても武器を持っている人に囲まれている状況では好転しないので、大人しく指示に従い広間から出ることにする。

広間から出ると外に出た。

風が気を抜くと吹き飛ばらせそうになるくらい強く、見晴らしが良い。

良すぎる。

地平線の彼方まで見渡せる自分達のいる場所が、ギアナ高地ばかりの断崖絶壁で、眼下に広がる町並みから、かなり高いところにいることを思い知らされた。

背後を振り返ると僕達の召喚された建物は、ギリシャのパルテノン神殿のような形をしており、その巨大な建築物がこんな高い場所にあることに畏敬と感動と違和感を感じる。

白峰達は周囲の武装したオジサン達にせっつかれて、幅が一人分しかない階段を降りることになった。

僕の事を無視しているようなそぶりをしていたが、気のせいだと

思つて異世界組の最後尾の黒淵の後に続いた。

階段は崖に作られた難所で、此処を鎧着て上り下りする兵士の方々には尊敬した。

ハッキリいつて怖すぎる。

風はビュウビュウ吹いて身体を持ってかれそうだし、足元は急勾配で滑りやすい。

遙か下の足元には立派なお城と町を歩く人が見えて、その絶景の素晴らしさに目眩を起こしそうだ。

其れを僕よりも大柄な人が鎧着てマント羽織って降りていくなんてサーカスの綱渡り並みに危険すぎる。僕だったら頼まれても拒否する。(後で関係者全員に浮遊の魔具が配られていることを知った。)

危険すぎる階段で後ろにいる騎士のおじさんが妙に間隔を詰めてきている事に気がついた。

明らかに前にいる人たちの間隔の半分しかない。まるで僕の存在に気づいていないような。

この狭い階段での危険な行為を我慢して、人がすれ違えるほどの踊り場に来ると、僕は慌てて広場の壁に手をつけて馬鹿騎士をやり過ぎそうとした。

スカッ

手をついたはずの壁がすり抜けて僕はバランスを崩す。

何とか踏みとどまろうとした瞬間に突風が吹いて後押しされた。

僕は壁の中に飲み込まれてしまった。

1 召喚（後書き）

本文中に主人公の本名が出ることはありません。

2 地下神殿

ひゅー~~~~~んんんんん

真つ逆さまに落ちていく僕

……

有名な歌のメロディが頭を過ぎるが、そんなことをしている場合ではない。

壁を通り抜けた後、結構長い時間暗闇の中を頭から落ちている。

このまま頭を下にしているのも面白くないので体勢を立て直すとしゅー。

ひゅー~~~~~んんんんん

てゅー！

キヤッ 空中 回転！！

掛け声とともに頭を基点にして足を下にすることが出来た。

……さてこれからどうしゅー？

とりあえず踊るか。真つ暗闇の中で落ちていくと恐怖で精神が壊れるとしゅー。

マラカス振りながらランバダを踊ってみる。

しゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃか

ひゅー~~~~~んんんんん

……このまま墜落死したら非常に間抜けな死に方じゃなかるうか？

なんか、こつっ、格好良い死に方がいいな。

そつっ例えば黄金　ツトのような。

ふわははははははははははははははははははははははあは

ひゅー~~~~~んんんんん

しまった！黒マントが無いと格好つかないじゃないか！！

どつやったら格好良い墜落死が出来る？

どつやる？

僕が真剣に格好良い死に方について悩んでると足元に光が見え始めた。

どんどん迫ってくる光に馬鹿なことを考えるのを止めて光の中に入るのを待つ。

光の中に入ると落下スピードが段々弱められていく。

目が慣れると光の中はただっ広い洞窟で、洞窟の天井、床、壁のいたるところから淡い光が放っているのが観察できた。

洞窟の端までは遠くて小さな町がすっぽりと入る大きさだ。

端のほうに建物らしきシルエットが見えるが、僕が落ちて行く先には淡く光る何かの像の頭部が見え、その周囲には建築物が見当たらず、天安門広場のように広々としている。

それは某駅から見える観音様の全身像ぐらい大きい女神像であった。

頭の方から足元まで、弱まっていく落下速度もあって十分以上は掛かったのではなからうか？

足元から見上げると顔がまったく見えない。

まるでミクロの冒険をしているようだ。

『良くぞ来た。異世界の魂を持つものよ。』

女神像の足元に無事着地すると女神像の頭部から重厚な声が響いてきた。

どつでもいいけど、声の位置が遠すぎて聞き取りづらいんですけど。

『この神殿が出来てから四千年の月日が流れようとしている。

この神殿を作った教皇……』

…中略…

……なる地殻変動により、かつての力は失われ。溜め込まれていたエネルギーも今回の異世界召喚により底を尽きようとしている。

もつすぐこの地を守る結界は無くなり、彼の魔神が復活するであらう。』

やっと長い説明が終わるのか。

『異世界の魂を持つものよ！世界の意思にて我が民を導け！！！！』
声が終わると僕の前にあった供え物の台座が滑るように奥に動き、
中から短剣が刺さった台座がせり上がってきた。

短剣は儀式用には無骨で、形はクナイに似ていてクリスタル
のように無色透明、柄頭の輪っかの中に地色が無色透明で遊色効果
のあるオパールらしきものが填まっている。

僕は短剣を引き抜くと繁々と眺めていたが、その後の変化が何も
無いことに気がついた。

えっ？これだけ？

帰してくれるんじゃないの？

どこどこなの？

どうやったたら元の場所に戻れるの？

この短剣の効果は？

僕の途方に暮れた疑問には地下神殿遺跡は広すぎた。

「たくつどないせえちゅうねん」

この洞窟の出入り口である大扉がびくともしないので、鍵が掛かっている結論付けた跡の言葉である。

この扉が開かないとなると、壁伝いに建築されている建物を一つ一つ丁寧に調べ上げるしか方法は無い。しかも隠し扉を見逃したらアウトである。

第一、こんなもの貰っても主人公でも無いのに物語の鍵を貰ったモブキャラ村人の心境でしかない。物語としては面白いかもしれないけれどもこういった曰く付きの物は時の権力者が持つか勇者が持つのが筋だ王様が王子様るうに。世界の意思白峰

やる気を失った僕は、扉に背を預けて意味も無く短剣を振りながら愚痴をこぼすしか出来なかった。

「せめて<MAP>があればなあ」

突然、三次元の立体的な図面が目の前に現れた。

「はいっ?」

なんで?どうして?どうやって?

目の前にあるものが信じられなかった。

複雑な経路が、実物を其のまま縮小したかのように精密で詳細に描かれている。

下のほうに弩デカイ広間と女神像があるから、この洞窟を示しているものだと解った。

しかも、自分のいる位置が赤い点で表示されている新設設計。目を疑うなというほうが頭がおかしい。

短剣の使い方を確かめるため、先程と同じように振り回しながら念じてみる。

「<炎よ出る>お〜」

ボワア

半信半疑の気の抜けた言葉の後に、剣先から僕の身長と同じぐらいの炎が現れて、数秒経ってから消えた。

驚きに声が出なかったが、なんとなくこのクリスタルクナイの使い方が短剣では無く、魔法の杖として使用することが分かった。

「ええつと、<説明書>」

少し悩んでこの短剣の説明書を出すことに決めた。

説明なしで使用するなんて怖すぎる。呪いとか知らないうちに大事なものが失われていきそうで、使い方を正式に知らないなんて、チユートリアル無しで中ボスに戦いに挑むのに等しい行為だ。

アイスファイク・クリスタル
世界の意思説明書

アイスファイク・クリスタル
名称：世界の意思

形状：クナイ型の無色透明の短剣、柄頭に高純度のエーテル結晶が

埋め込まれており、結晶内には世界エーテルとリンクさせる魔方陣が組み込まれている。

用途：所持者の意思を汲み取り、世界を創造し、変質させる。

使用方法：アースフィク・クリスタル世界の意思を持ち、切っ先を対象に向けて念じる。

説明文：創造神グラチアスによって世界の力を集めて使用する媒体として作られた。

所持する者はアースフィク世界を管理することが出来ることから銘々された。

……なんか、こっ厨二臭い武器である。

これはもう、チートアイテムというよりもゲーム管理者のための修正用アイテムといったほうが的確かもしれない。

ちょっとアイテム批判から逸れて自分のステータスを見ることにする。

アースフィク世界の管理ということならば異世界から来た僕は影響を受けない可能性があるからだ。

筋力、敏捷度、器用度、魔力……………

どうやら、異世界人であってもアースフィク世界にいるならば世界の一部として認識されるらしい。

ゲーム内でお馴染みの単語が並び、その横に数値が書き込まれている。

一寸変わったもので、物質存在量なんて元の世界の肉体を表す量

があるが、大筋では変わったものは無い。
ただ一点を除けば、

何で種族が幽霊？になっているんだ？

普通そこは人間とか人間？とか異世界人になっているはずだろう？なぜ人外？

幽霊？と表示されているところに剣先を当てて調査してみる。

幽霊？調査報告

異世界召喚により、上半身のみ転移した転移事故により死亡。上半身も転移時の魔力が支えきれずに世界の狭間に落ちる。

アースフィクには魂だけの状態で召喚される。

既存の幽霊とは質が違うため、幽霊という名称に当てはまるか疑問である。

なお、特殊な存在のため、勇者やエルフなどの精霊眼を持つものしか見えない。

知りたかったけど知りたくなかった情報が表示された。

どつりで召喚されたときに白峰達はジロジロ見られたのに僕だけ無視されたり、階段で降りるときに後ろの騎士が詰めてきていたりしたわけだ。

僕が死んで見えなかったのだから当たり前のことで、僕が影が薄かったり嫌がらせなわけじゃなかったんだ。

はははっ、僕、死んでたんだ。

すでに死んでいるという情報が受け入れられない。受け入れることが出来ない。

幽霊？調査報告の情報表示を消してステータスを眺め見る。

心が現実を受け付けない。

暇現実逃避でつぶしにステータス内の数値を短剣で弄って過ごした。

3 M C

まったく酷い目にあった。

地下神殿で自分が死んでいるという衝撃の事実を知った後、元の世界の人達が恋しくて地上にまで一生懸命這い上がってきた。

死者が生者を求めるのと一緒にいる。

白峰達に会いに行こうと思ったときはステータスをMAXにして、幽霊？が聖霊？に変わっていたけど、どう変わったのか良く分からない。

扉の鍵も、対人・対魔物用罾も、死霊、悪霊、魔物、ゾンビ、ス
ケルトン。全て世界の意思無双で薙ぎ払った。
アイズライク・クリスタル

やっとの思いで地上に出てみれば、今は夜で本当に地上か分からない状態。

松明が焚かれているのを見たときは涙が出るかと思った。

そして絶賛迷子中です。

MAPがあっても部屋の用途が分からず、聞ける人もいないので何処に行ったらいいのか分からない！

とりあえず初心に帰って、白峰達の居る所をMAPに表示させて其処に向かっている途中。

目的の部屋に近づくと明かりが漏れている。

なぜか此処までの道中、ひとけ 人気が無かったけど人がいるかもしれな
いという安心感から気にしなかった。

扉の近くに寄ると聞き覚えの無い言葉が聞こえてくる。

そういえば言語に関しては自分のステータスを弄っていなかった
ことを思い出して言語理解を入れてみた。

「くつくつく、首輪を嵌めた者は対になる指輪を嵌めた者に逆らえ
ないんだよ」

欲望に濡れた男の声。

典型的な悪役だ。

僕はそつと扉を開いて中を覗き見た。

「ほら、俺のを啜えろ」

仕立ての良い服装を着た男の向こう側で、黄蓮寺さん 黒髪の美しい少女が跪
くが見える。

彼女の顔が悲痛に歪んでいることから逆らえないのは本当のこと
らしい。

見覚えのある人に出会った安堵感と好意を持っていた少女が汚さ
れる怒りに心がグチャグチャになった。

とりあえず黄蓮寺さんの部屋から追い出さないと。

男の背後に素早く潜り込んで世界の意識短剣の切っ先を突きつける。

「君はヤル気が無くなる」

こんな男にあの可憐な唇が汚されている状況に腸はらわたが煮えくり返る！

「ちつへたくそめ。ヤル気が無くなっちまったじゃないか」

男は僕に気がついた様子も無く奉仕させていた黄蓮寺さん突き放して部屋を出ようとした。

男が振り向いたとき見つかったかと冷やりとしたがそんなことも無く、男はそのまま部屋を出ようとしている。

どうやら短剣の効果が発揮されて僕のこと認識されていないようだ。

内心ほっとする。

この世界に存在するもの全てに効果あるといっても生物を変えることが出来るのか半信半疑だったからだ。今回は良い実験になった。

黄蓮寺さんは呆然と突っ立っていたので、短剣の力で眠るよう指示する。

男が部屋から出て行ったので、僕は制裁を加えるために男に付いて行くことにした。

扉を透過して部屋の外に出たとき、少し頭が冷えたのか、相手の身分が高そうなのが気に掛かった。

このまま闇打ちしてもいいけど、まだ騒ぎにしたくない。

廊下をノシノシと歩いて行く背中に再び短剣を突きつけて命令する。

「<あなたは指輪を落とすがそのことに気が付かない。」>

男は自分から指輪をはずして落とす。

僕は指輪を空中でキャッチすると再び背後に回る。

こんな石の床で指輪の音が鳴ったら誰かが来る可能性があるからだ。

再び命令しようとしたが、廊下の角を曲がり、明かりが焚かれて兵士がいる場所に足を進めてしまった。

さすがに複数の人がいる中で命令する気も無いし、指輪を奪うという最低限のことはしたので、そのまま行かせることにした。

指輪を短剣で作った亜空間アイテムポケットに入れて、黄蓮寺さん以外の他の人の様子を確かめる。

主人公補正の人達とはいえ、何か命令されていないか心配だ。

暗がりに体を埋めて空間に短剣を刺して映像を見る。

<赤瀬朋美>

ベッドの中でグースカ気持ちよさそうに寝ている。

……心配なさそうなのでそっとしておこう。

<黒淵夜彦>

暗闇の中を走っている。

背景から察するにどこかの街中だろうか？人のいないところを選んで町の外に出るようだ。

あっ、目が合った。こちらに気が付いたかな？

画面がブラックアウトしたので、あちら側の干渉があったと思われる。

……あれくらい強ければ放って置いてても問題ないだろう。

<白峰光>

全裸で金髪の美少女と絡み合っている。

………もうタラシたのか。

召喚時に見た少女とは別人なので、少なくとも二人は落ちた計算になる。

さすが人類の敵。二度と心配してやらん！！

目の前の映像をエロビデオのように舐めるように観ていると、映像内の部屋の扉から誰かが部屋の様子を覗いていることに気が付いた。

映像を其方に回すとメイドさんが自分を慰めている。

主あまじの濡れ場に興奮したのか？はしたない。

僕は他人が覗いてる様子に気分が冷めて、映像を消した。

男共はサポート無しでも大丈夫だろう。だけど女の子達は今日みたいなことを防ぐために影ながら守る必要がある。

……さてどうするか？

城の中は朝から騒がしい。

勇者の誰かが部屋から居なくなっただのが原因のようだ。でも下っ端の人達は妙に安心しているもんで噂を集めてみた。

結果、どうやら黒淵は発現の儀で闇を出してしまい恐れられていたらしい。

昨日の夜に観た姿は逃げている処だったのか。

大方、殺されそうなので逃げ出したのが真相なのだろう。納得してしまった。

黄蓮寺さんはファンの男共に囲まれて分かりにくいけど、昨日の夜の事が無かったように振舞っている。

上から圧力が掛かっているのだろうか？

己を知らば……ではないが、この国について調べておくことにする。

あの女神像がこの国を導けとか何とか云っていたが、一誰にも認識されないこの身《幽霊？》の時点ですでに詰んでいる気がした。

まあ、何かをするにしても圧倒的に情報量が少ないので最初に歴

史から短剣で表示させる。

<オルスターン神聖王国>

元々は魔神を封じた祠であつたが交通の要所であつたため、教王ゲルニフ・クラーチの手により地脈を使用して結界を範囲強化した。その後、地下神殿と天空召喚陣を作りオルスターン聖神殿となつたが、いつしか人々は破壊神のことを忘れると名称を変えて、初代リチャール王によつて神聖王国を名乗る。

地脈により簡単に勇者召喚が出来ることから、政治的な理由で安易に召喚して事が終われば暗殺するという使い捨ての道具と考えられている。

草食系魔物ギーチアを利用して開墾をしていたブラータ族を魔王の手下の魔物使いとして全滅させ領地を占有していたが、維持できずに荒廃化すると魔王の呪いとして発表したことは、オルスターン神聖王国を象徴する事柄であり、現在、隣国の友好国リシャクに宣戦布告も無くリシャク国第二の都市ミクラスの町を蹂躪して壊滅し、リシャク国は魔王と繋がっていると非難した。これによりリシャク国とは友好を決裂し、戦争状態にある。

神殿の結界に守られている安心感からか人種差別が激しく、王都の住人以外を見下す傾向にある。

王都以外の人達からは、結界都市、甕の中の汚物、引きこもり反面教師等の愛称で親しまれている。

……なんか、もう、こんな国、滅んでもいいような気がしてきた。

やる気が無くなったので、日向ぼっこして過ごそうと気持ちのよ
さそうな陽だまりを探して歩いてしていると突然声を掛けられた。

「ちよつと!」

初めは僕に声を掛けているとも知らずに無視していた。

「ちよつと待て!」

二度目の声で声の主に振り向いた。

赤瀬さんが長いポニーテールを垂らし、急いで駆けて来たのか大
きく息を弾ませている。

こう真正面から見るとたわわな胸が目の保養になるなあ。

周りを見回して自分以外に人が居ないので、改めて自分が呼ばれ
たのに気が付いた。

自分を認識できる人間に出会えてちよつと嬉しい。

「あんた、わたしと同じ世界から来たんじゃないか?」

……………はいっ?

……………君、召喚前に助けに入ったよね?僕と同じクラスだよね?半
年間一緒に過ごしたよね?

「日本人だろ?わたしの言葉が解るよな?」

いや、そんなキラキラした希望に満ちた顔でこちらを見なくても……僕のこと忘れたわけ？

あっそうか、忘れたのか。

僕の影が薄いのがいけないのか。周りを見ないこの女がいけないのか。

所詮、主人公は人のことを気にしないで駆け抜けていくのか。

次々と捲くし立てて高調する赤瀬とは対照的に、僕の心は冷えていく……

「人の居る所で僕に話しかけないほうが好いよ？」

僕は普通の人には見えないから」

赤瀬の後ろを指差して、後ろにいる金髪ツインテールの身なりの良い幼い少女が可愛そうな目で彼女を見ていることを教えて上げる。

「お姉さまに心の病がおりだなんて……」

「いや、シャル、これは違うんだ」

「いえ、何もおっしゃらなくてもよいですわ。

お姉さまに心の病がおりになるうとも、このシャルビアがお姉さまの全てを愛して差し上げますわ……」

「だから違うんだって……！」

パニックしながら誤魔化している赤瀬をその場に置いて、僕は逃げ

るようにその場を立ち去った。

覚えてないだつて？

召喚に巻き込まれて死んだのに覚えてないのか。

彼女達は帰れる可能性があるのに僕だけが元の世界に戻れない。

その拳句、一緒に居たことも忘れられている。

……僕の胸に宿る憤りは当分消えそうに無かった。

3 MC(後書き)

MC≡マインド・コントロール

2011/4/23 明菜の言葉遣い変更

4 畜生

其処は練兵場の外れにある倉庫であった。

無数の男達のたまり場になっていく隅に僕は身を隠して時が来るのを待っている。

赤瀬と分かれた後、僕はイライラしながら城中を歩き回っていた。そんなとき、ふと騎士達が集まってヒソヒソ話をしているのが目に入った。

その光景が妙に気に掛かって近づいてみる。

何だろう？何かの場面に似ているような？

あれだ。不良達が良くする悪巧みに似ているのだ。

僕が騎士達の様子を伺っていると、昨日の夜、黄蓮寺さんを夜這いした男が騎士達に近づいていく。

「おいつ、準備はいいな？」

男の声に周りの騎士達も頷く。

なんかキナ臭い。悪いことの予感がする。

男達が顔をニヤ付かせながら集団で何処かに行こうとしているので後を付けて見ることにした。

薄汚れた明かりが一つしかない暗い部屋の片隅で、僕はこいつらを拘束する方法を考えている。

早く事を起こしてくれないと男の汗と匂いで死にそうだ。

しばらく待っていると、付き人に連れられた黒髪の少女が入り口から入ってきた。

どうやら黄蓮寺さんが騙されて付いてきたようだ。

悪意に敏感そうな彼女も、まさか付き人までグルとは思っていないなかつたらしい。

付き人に自分の武器を預けているようで、その付き人も部屋の奥に入り込みすぐに手が出せない状態だ。

付き人が奥に入り込むと入れ替わりに騎士達が背後に回り扉を閉める。

暴漢達は連携された動きなので、過去にもこんなことがあったのであろう。

彼女の意思に反して扉が閉まり、男達が下卑た笑いを一層深める。

騙されたと気づいた黄蓮寺さんは鋭い目を細めて小屋の人数を確認する。

「……何か御用ですか？」

部屋の中に冷たく凜とした声が響き渡る。

しかし、それでもこの部屋の主には心地よいスパイスにしか感じなかったのかもしれない。

「なに、黒の姫様に慰めて貰おうかと思ってな。

今日は朝からお前に夜伽に行った事や首輪と対になる指輪を落と

した事で怒られて傷ついているんだ。

だから楽しませてくれよ」

クツクツと、イヤらしい笑い声に答えて周囲の人間も笑い声を上げる。

騎士の一人が黄蓮寺さんを捕まえようと不用意に近づいて手を延ばす。

ただ彼女が男の腕を取ると間接を極めながら投げ飛ばした。

武器は無くても古武術の家に育ったため無手での攻撃方法は習っているであろう。

力押しの騎士に対して鮮やかな投げ技であった。

さすがの男達も驚いて声を失う。

「下劣な好意などお断りです」

彼女の言葉が起点になったのか騎士達が一斉に襲い掛かった。

一人、二人と対処していく黄蓮寺さん。

しかし彼女も多勢に無勢で、長い髪を引っ張られ、身体を蹴られて、女性として意識して身体を硬くしては抵抗の余地が無い。

「さあ、大人しくしな」

少女は手足を押さえつけられるが反抗的な目は衰えなかった。

男達は清楚な少女の美しい肢体がもがく様に色めき立ち、本能を刺激されて我を忘れている。

さて、そろそろ動くか。

<範囲、この部屋の中、対象、僕以外の人間の男、効果、四肢の麻痺、持続時間、1時間：発動>

部屋にいる男達がバタバタと倒れていく。

長々と設定してしまったけど、黄蓮寺さんが抵抗していたお陰で間に合ったようだ。

これが出来なかったら一人一人短剣で刺していかなきゃならない所だった。

突然男達が倒れて驚いていた黄蓮寺さんも事態を把握したのか、自分に押し掛かる男を蹴り飛ばして、瞬間移動したかのような速さで男達から距離をとる。

僕は彼女が身なりを整えている間に男達に罰を与える。

<範囲、この部屋の中、対象、僕以外の人間の男、効果、女性恐怖症、男性生殖器の不能、持続時間、1年：発動>

まあ、罰としてはこんなものだろう。

軽いかもしれないけど、一年間の間に性格が変わっている事を祈る。

僕は扉を開けて黄蓮寺を促して一緒に部屋から出た。部屋の扉は一日開かないように設定しておく。

僕は気分を和らげるために笑みを浮かべて上げると、ぺこりと頭を下げられて、まだ硬い笑みを返してきた。

「連中は罰として、女性恐怖症にして不能にしといたから」

「……ありがとうございます。助けられたのは三回目ですね」

まだ男達に襲われた恐怖があるんだなあ……じゃなくて、今なんて言った？

三回目？二度目じゃなくて三回？

この世界に来てから二回助けたから召喚される前の最初の一回を覚えている事になる。

本当に？嘘じゃなくて？

クラスメイトの赤瀬が忘れてるのに？

「元の世界で助けた事を覚えているの？」

「覚えていますけど？」

俺の疑問に小首を傾げられてしまった。

……ということは、だ。赤瀬が忘れてるのは赤瀬が個人的に忘れてるのであって、決してパラレルワールドに迷い込んだわけでは無いということだ。

自分を覚えてくれる人がいる事に単純に嬉しい。

でも、僕の記憶と違っていたらどうしよう？

「……その制服、あなたは私と同じ学校の人ですよね？」

「そっだよ？赤瀬と同じクラス」

確認の声に笑顔で答える。

赤瀬と話し合ったときとは比べ物にならないくらい心が軽くなるのを感じる。

僕達は記憶の補間をするように、召喚されてから今までのことを話し合いながら部屋に戻ることにした。

部屋に戻る途中、近道だということで人気の無い道を歩いていた。襲われたばかりなのにこんな道を通る事にしたのは昼間という事と早く部屋に戻りたいという彼女の意見があったからだ。

「Ah……ん………やぁ………ん………」

暗がりの奥から女の人の呻き声のような声が聞こえてきた。

今日、自分の身にあんなことがあったからであろう。黄蓮寺さんは顔を青くすると暗がりの中に迷いもせず足むけた。

足音を立てないで気配を殺して忍び寄ったのは、まだ理性があったからなのだろうか？女性として、つい先程の暴漢の記憶に立ち向かう勇氣には敬意を表したい。

しかしながら、物事には往々として知らなければ良かった事がある。

目に入ったのは男と女の睦み事であった。

目を凝らすと、昨日の夜に覗きをしていたメイドさんを白峰が後

るから唇を奪い腰を打ち付けている。

もう喰ったのかと苦々しく観察していると、顔面を蒼白にした黄蓮寺さんは逃げるようにその場を駆け出して自分の部屋の方向に逃げ出した。

僕は何とか追いついて話しかけようとしたが、部屋の中に入られて鍵を掛けられてしまった。

しばらくの間、出てくるのを待っていたが、メイドさんが夕食の準備が出来た事を伝えに来て、も気分が悪いと追い返してしまったので、さすがに心配になって部屋に強制的に入る事にした。

身体を透過させて扉をすり抜ける。

初めて使ってみただけで自分が人外だという確認にしかならなかった。

……人としての身体を失った事が寂寥感に胸を突かれる。

「じんばんわ」

黄蓮寺さんはベッドに丸まって泣いていた。

僕の挨拶に何のリアクションを返そうともしない。

「白峰のこと知らなかったのかい？」

そのものズバリの事を聞くと体がピクリと動いた。

「元の世界でも有名だったよ？白峰が複数の女性と関係があることなんて。」

黄蓮寺さんは納得済みで付き合っているのかと思ってた」

しばらく待ってみても動く気配が無かった。

「じゃあ僕は行くよ」

「待って」

顔を伏せたまままで黄蓮寺さんが僕を引き止めた。

「……行かないで」

顔を上げてこちらを見た彼女の顔は涙で濡れていたが、何かを決意したような顔をしていた。

「……お願い。」

お願い。私を汚^{けが}して」

冥^{くら}い瞳が僕を見つめている。

彼女は絶望に堕ちる事を望んでいるようだ。

それは逃げなのかもしれない、甘えかもしれないが、彼女の精神を保つには必要なことなのだろう。

そして僕に求められているのは、彼女を汚すための都合の良い人形。

僕は側に座ると顔を合わせて瞳を覗き込んだ。

漆黒の美しい瞳、白く透けるような肌、小さな唇、小ぶりな顔、

黒く真っ直ぐに流れる髪の毛。

全てが欲しい。

僕は白峰あけつよりも深く貪り喰むう。

5 異空間

……太陽が黄色くない。

朝、朋美黄蓮寺が何事も無かったように取り巻きの男達逆ハレムに挨拶をしている頃、俺は図書室に設置された椅子で疲れ果真っ白に燃え尽きてていた。

念願初恋の人との肉体関係エッチな（しかも処女だった）になれたことは嬉しいが、問題点もいくつかあった。

まず一つめ、こちらから触れるのに向こうから触れない。
無意識の念動ホルターガイストだか騒霊だか知らないが、なぜかこちらから触れるのに向こうから触れない。これでは人肌が一方的にしか触れられないので、全身を触られるように意識すると味気ないものになってしまう。

排泄物による満足感も感じさせることが出来ない。

これでは今後の性交渉の上ではあきらかにマイナスだろう。

次に、彼女の要求が高い。

こちらとしては知識の限りを尽くして満足させてやろうとしているのだが、彼女はそれはるか上の行為を要求してくる。できる限り彼女の欲求には答えて上げたい。しかしながら、こちらの知識と経験が足りないので欲求に答えられないのが現状だ。

そこで、考えたのが別の空間の構築だ。

元となるのはこの城。イメージしやすいし、コピーして宝物庫を利用すればお金が使い放題。暇なときに探検して遊べると一石三鳥。この城のコピーを中心に亜空間を作って、こちらと中の時間の流れを分けてあげれば、満足してこちらに帰ってきてても、そんなに時

間が経っていないから、こちらの生活に乱れが無い。

そして、中にいる僕を人形にして、基本僕の思いどおりで、彼女
のして欲しい事を感じ取れるようにして上げれば、人肌の問題も、
欲求の問題も、排泄も絶倫もカバーできる。

……なんて素晴らしい発案だ！早速実行に移らねば。

僕は今日の夜から使えることを目標に、左腕の中に隠した世界アースライクの
クリスタル意思を使用して異空間の構築と人形の作成に入った。

人気の無い図書室で一人黙々と異空間の構築に性を出していると、
傍らに誰かが立って僕の手元を除きこんでいることに気が付いた。

赤瀬だ。

「何している？」

今まで集中していたので気が付かなかった。

城内では1日ぶりに第一王子が救出されて大騒ぎになっていたが、
図書館では遠い空の出来事で、静かな空間は研究にのめり込むのに
丁度良すぎたのだ。

僕が無視しようか素直に現在していることを答えようか迷ってい
ると、痺れを切らしたのか違う問いかけをしてきた。

「あなた、なんて名前だ？」

此方が本題の問いかけなのだろうが、名前を尋ねられて返答に困
った。

僕のことを覚えていないのに素直に答えるには何となく悔しい。

だけど教えない事を嫌がらせに変な渾名を付けられても困る。

「……………ルイナークにしとく」

長い沈黙をかけて偽名を名乗る。

昔考えた厨二臭い恥ずかしい名前だけど他に思いつかなかったからしょうがない。

山田太郎とか、名無しの権兵衛とか、キャサリンとか脳裏を過ぎったけど、芸に死ぬわけにはいけないのでやめた。

「なんだ？しとくって！？どう言うことだ？！」

赤瀬が持っていた本で僕の頭を叩はたこうとした。

スカッ

本は僕の頭をすり抜ける。

「えっ？」

暴力女は驚いて固まってしまった。

確認するために何度も本を僕の頭を通過させて行ったり来たりさせている。

「あんだ、すり抜けるよ？」

「ああ、霊体だからね」

僕がこともなげに言うとしョックを受けたように一歩下がってよ

ろめいた。

「霊体？」

「幽霊とも云うな」

「ゆ、ゆ、ゆ……ゆうれい?????」

認識したのか、すごい勢いでその場を飛びのいて本棚の陰に隠れる。

青い顔でガタガタ震えながら此方を覗く姿にチョット罪悪感が湧く。

好きでこんな姿になったわけじゃないのに……

図書室の入り口からローブ姿の少女が来たようだ。

栗毛の可愛い容姿で、僕が見えていないから赤瀬が震えている様子に首を傾げている。

背後に回られている赤瀬は気づいていない。

「あの？アキナさま？」

「ひいつ」

後ろから声を掛けられて飛び上がる姿はどこぞのアニメを見ているようで面白かった。

「なっなに？」

「公女様がお呼びしていますけど？」

「わかった。すぐ行く」

赤瀬は逃げるように図書室を出て行った。

栗毛の少女は此方を見て首を傾げたが、僕を見ることは出来ずに、すぐ赤瀬の後を追おうとした。しかし、図書室の入り口で同じ顔の少女に捕まって足止めを食った。

後から来た少女は全身鎧フルプレートを着込んでいる。

二人は双子なのだろうか？

栗毛も背格好も顔の形も声の高さも同じで、着ている物が違わないとまるで区別が付かない。

「兄様。アキナ様は見つかった？」

「先程、公女様の元に向かわれたよ」

「じゃあ、ボク達も急いで準備しないと」

そう言つと彼女達は図書室から去って行った。

……兄様？

今夜の準備

お仕事も終わり、図書室からの帰り道で白峰糞野郎が女性に囲まれて談笑しているのが目に入った。

相変わらずムカついてくるが、良く観察してみると女性達がチラ

チラとお姫様の様子を伺っているのが見て取れる。

その様子は主人お姫様のご機嫌を取るために「んぢやん」白峰を誉めてゴマをすっているロクテナシ仕事無能力者ようだ。

……なるほど。権力に擦り寄るために自慢の愛犬を褒め称えて機嫌を損ねないようにおべっかを使っている訳だ。

そう思うと、そのことに気づかずにはらへら笑って鼻を伸ばしているバカ白峰のことが憐れに思えて来る。

生暖かい視線で彼等の様子を見守った後、白峰に見つからないように踵を返すと其処に朋美さんがいた。

いや、この場合は朋美様と言ったほうが適切か。

表情の無い顔で棒立ちしている姿は、等身大の人形と間違われてもおかしくないほど生気がない。

もちろん彼女の視線の先はハレム王白峰。

これからの展開が楽しみな光景である。

……冷気を吐き出す御方が目の前に居なければの話だが……

背後でキヤーという黄色い声が聞こえてきて振り返ると肩白峰がお姫様にキスをしていた。しかもディープなやつを。

恐る恐る黄蓮寺閣下のご様子を伺うと目を見開いて固まっている。僕は無意識に後ろに一步を踏み出したが勇気を振り絞って踏みとどまる。

若 後ろの男の敵白峰に見つかるわけにもいけないし、目の前の般いたいけな少女の横を通り過ぎられるほど薄情ではない。(そもそも足が動けな

い)

まさに前門のトラ後門のオオカミ。

後ろで楽しげな声が聞こえてくるが目の前の危機が優先なので、取りあえず僕の精神にダメージを与え続ける毒を食らった状態を回避すべく、トラの尾を踏んで状況を動かして改善を促してみる。

「お〜い」

顔の前で手を振ってあげるとすぐに気がついてくれた。

昨日の濡れ場を見たにしておは僕が存在を忘れるほど衝撃的なことらしい。

……そんなに^{危険物}白峰のことが好きだったのだろうか？それなのに僕に抱かれた？^{恋愛対象}白峰を忘れるため？まだ割り切れていない？自分を汚して^{最低}白峰と同じ位置に立とうとした？

白峰の変わりに僕を睨み付けているので、彼女の心境を考えて現実逃避していたら、腕を掴まれて^{青春会議}白峰達とは反対側の道を早足で歩き始めた。

……あつれ〜？僕の身体すり抜ける筈だよね？なんで？

鬼夜叉に攫われたお姫様の心境で疑問に思いながら付いて行くと、彼女に宛がわれた^{汚物}私室にたどり着いた。

どうやら^{汚物}白峰を迂回して部屋に戻ったらしい。

先程まで僕の腕を掴んでいた彼女の手を不思議そうに見つめてみるとそんな僕が可笑しかったのかクスリと笑われた。

「私の一族の流派には悪霊を相手にするための業もあるのです」

黄蓮寺家に伝わる古武術の中に化け物相手に戦うものもあるようだ。

「というか僕が幽霊だということがばれてる?!
いつから?どうして変わらず接する?」

「あなたが霊体なのは一昨日の夜に助けていただいたときに気づきました。本来なら天に返すことが筋なのでしょうけども、あなたを見ていると唯の霊体に思えなかった。」

「どんどん真剣なものになっていく彼女の表情を僕はただ見ている
だけしか出来ない。」

「あなたの正体が知りたかったけど、もうどうでもいいこと……
幽霊でも化け物でも私を汚してくれるなら誰でも良いのです。彼
を好きでいた自分なんて消してしまいたい。」

「魂ごと消えてしまいたい!」

目に涙を溜めた彼女の告白に庇護欲をそそられるが、所詮、道具
としてしか見られないことに、彼女を好きであった熱が急速に冷め
ていくのを自覚していた。

……僕は召喚に巻き込まれて死んだ。僕と彼女達は違う世界に住
んでいるんだ。

そう思うと越えられない深い溝が横たわっているように感じる。

「彼のこと忘れさせてくれるなら、あなたが人外だろうとかまわな
い。」

うつん、人で無いほうが良いです。

……お願いします全てを忘れさせてください」

朋美は無理やり微笑で僕を受け入れようとして来たが、僕には痛々しく見えて気分が乗らない。

ただど若さからか霊の性なのか、肌を重ねるといって誘惑には逆らえなかった。

5 異空間（後書き）

2011/4/23 明菜の言葉遣い変更

6 ピーピング・トム

素晴らしい朝焼けの中、数日ぶりの外の風に当たってリフレッシュをする。といっても時間の流れの違いで、此方ではつい昨日のことなのだが……

ということでは気分転換に今日は騒人のいるがしい城内を散策したりする。

まず手始めにメイドさんの着替えを覗いてみた。

もちろん単なる出歯亀をしたかった訳ではない。

一般人に自分の存在が気づかれぬか、また、どの程度なら気づかれるのか実験する必要があった。

更に言えば騒いでも問題にされないくらいに身分が低くて気のせいで済まされる立場の人間が良かったのだ。決して趣味ではない。

ふむ、基本はみんな紐で結んであるのか。しかしながら白は良いけど野暮つたい無地なのはいただけ無いな。レースぐらい付けてもいいのに。

そういえば産業革命以前のレースって高級品だったっけ？お姫様なら付けているかもしれないけど白峰の顔を見るのは嫌だな。

着替え終わった
ジロジロと眺め終えたので、実験として触診セクハラしてみる。

うん、右手で触撫で回してみてもつても悪寒程度で済まされているけど、左手を使うと実際に触られているように感じるらしい。

この差は左腕の中に世界アイスフィク・クリスタルの意思が入っている差なのだろう。今後の生活の中で気を付けなくてはならない。

アイスフィク・クリスタル
世界の意思は左腕の中に溶け込ませてある。

理由は持ち運びに不便なのと道具弱音を使用している姿を晒したくない

かったからだ。左腕にした理由も右腕だと無意識に使用してしまう恐れがあったのと、一瞬の躊躇いを作る為のストッパーになれば良いと思ったのだ。……戦闘や緊急事態での躊躇いは練習で消すことにした。

「十分堪能した《悲鳴を上げて逃げられた》後は、情報の収集のための王宮内の探索を実行する。」

「今まで君子危うきには近寄らずではないが、消極的だった行動も今回のメイドさんの協力（尊い犠牲）によって自信がついたので潜入（スニーク）してみた。」

「まず、重要な場所と言えば王様の執務室である。」

いきなり最高難易度だが、もしかしたら朋美（黄蓮寺）以外の首輪の対になる指輪が手にはいるかもしれないと期待しつつ、抜き足差し足忍び足で接近を敢行した。

「コソコソと偉そうな人のいる部屋を一つずつ虱潰しにして行くと、悪代官面で横柄な態度を取っているブタにロープ姿で痩せ細った男が緊張しながら報告を行っている場面に出会った。」

「高貴そうな服を来た悪代官の鋭い眼光に、栄養失調気味の中年が顔を蒼白させている様子は、まるで何処の上と下の突き上げを食らっている中間管理職の様で見るものを悲哀に誘う。」

「……以上で、昨日の大規模な魔力震について報告を終えます」

「つまり、何も分からなかったということか」

「はい、ですが私見ながら先日（黄蓮寺）の結界消失の件と何らかの要因があると思われれます」

「結界については良く分からないが、魔力震は昨日の王城を全てコ

ピーしたときに起こったものだろう。

そりゃ地下神殿含めた王城丸ごと異空間に複製すれば魔力震時空震のやつや二つ出来るものだ。

彼が怯えているのは僕のせいだから少しは反省しとこつ。

「まあいいだろう。引き続き結界が消失した件と魔力震の調査を命じる」

不機嫌そうな調子で命じ、青年を平伏させて部屋を出て行かせると、青年と入れ替わりで好々爺然とした老人が部屋に入ってきた。

老人は柔らかなその顔から考えられないほどの腐りきった目で不機嫌な主を唾う。

「おや、虫の居所が悪そうすな」

「馬鹿息子が指輪を失くすわ、王都の結界が消えるわ、原因不明の魔力震が起きるわで、折角、公爵家の小娘を勇者の一人から離れさせたのに計画が狂いまくりだ。

して、そちらはどうだ？」

王都の結界が消えた？昨日の作業のでは魔力震だけのはずだが？
思い浮かぶのは地下神殿にあった馬鹿でかい女神像。あれに関係があるのかもしれない。

「隣国リシャクに和平の使者を向かわせましたが、我が神の国を恐れぬ野蛮人どもばかりで、我らが統治して差し上げようという親切心に唾を吐いて徹底抗戦をするそうです。」

それと闇を発現した勇者の方は、暗部の手の者を振り切って見失ったそうです」

「リシャク国は予想どおりだな。予定どおり進めるように。勇者は取り逃がすと痛い仕方がない。暗部の者どもを戻しておけ。不測の事態に備える」

「かしこまりました」と断って老人が退出した。その後、この部屋になら指輪があるかと思って探してみたが見つからず、執務室で処理している重要書類を盗み見たりして有意味に過ごしてみた。

突然だが此処で霊体についての話をしよう。

霊体の初期状態は幽霊である。

幽霊が力を付けると祖霊・聖霊・悪霊に分かれ、それぞれ、祖霊から精霊になって精霊王となり、聖霊から神霊になって亜神（魔神）となり、悪霊から邪霊になって死霊となる。

それぞれ最終的には神（邪神）となるが、必ずしも分別された通りにランクアップされるものではない。

「聞いているの！？ハイエルフの女の子知らないの？知っているか知らないか言え！！！」

祖霊が神霊になることもあれば悪霊になってしまふこともあり、聖霊が精霊や邪霊になってしまふこともある。

また、ランク（格）はその霊体が持つ力では無く、ある条件によって上がったたり下がったり変わってしまうのだが、霊体の世界ではランクがものをいう世界でもあるのだ。

「反応しやがれ！くそ聖霊！！！！！」

ということでも力が強くてもランクが低ければ下っ端なので目の前の精霊のように命令されることもあるのだ。

「もういいわ！あんたのせいで時間の無駄になっちゃったじゃない！！」

霊体について思考している間に、勝手に怒って空のあなたに去って行ってしまった。

中庭を歩いていたら突然やってきて、嵐のように捲くし立ててすぐにいなくなる。流石は風の上位精霊様だと関心してしまう。

ついでに彼女の名前は風の精霊キュキュリス。ハイエルフの少女リーフルーテを探しに来たそうだ。

アースフイク・クリスタル
世界の意思使えばすぐに見つかるのに……短気は損気のいい見本である。

この後も噂話を収集したが、朝から動物達が怯えているとか、第二王子が不能になったから光の勇者に乗り換えようという下世話な噂話とかどうでも良い話だけであった。

人生においてのスパイスである厄介ごとは、本人がトラブルメーカーでは無い限り受動的に授かる事故であり、本人のせいでは無いむしろ一般人のモブキャラにとってトラブルは極力回避するものであり、首を突っ込むものでは決してない。

しかし、運命、世界というものは偶然という必然であり、人間は

それを打倒するために生きていると云っても過言ではない。まして、人災という必然は当然の如くありえるものである。

……何が云いたいかというと。

百合の花が咲いていた。

黄蓮寺
朋美の部屋に帰ってきた僕を出迎えてくれたのは、赤瀬の身体を弄って蹂躪している朋美の姿だった。

ベッドの上で横たわった二人は、白く丸びを帯びた肢体を隠そうともせず、蛇のようにつねらせながら肌を薄桃色に上気させていく。

「やあん、らあめええ」

朋美の愛撫を受けて赤瀬が否定の言葉を出しているが、既に意識を朦朧とさせて抵抗の意思を示しておらず、全てを受け入れてマグロ状態になっている。

一体何時から絡み合っているのだろうか？突っ込みを入れて止めさせるべきか？観賞することが漢として正しい行為なのか？リアクシヨンをとるには何が一番良いのか？朋美がタチで赤瀬がネコ？性格的には逆じゃないのか？

「いつっ」

「あれっ痛くしたのに気持ち良くなっちゃったんですか？
変態なんですね。」

それならもっとうち気持ち良くしましょう」

朋美はそう云うと指先でグリグリと捻り上げた。

思考が絡まっている間に事態はドンドン進んでいく。
此処まで事態が進んでいると、止めるのも野暮なので静観するこ
とにする。

それにしても何で赤瀬がこんな状態になっているのだろうか？
責め立てられてのた打ち回っている赤瀬を眺めながら考えてみる。

もしかしたら、昨日の異空間での行為の記憶が残っていて、その
ことで朋美に相談して振り返り討ちにあつたのか？

朋美を満足させるために変態行為調教に手を出した僕は、刺激を増や
すために城内（白瀬以外）の寝ている人間の精神を夢として招待し
たのだ。

犬の散歩や公開ショー、撮影会などの観客サクラをして貰って、淫らに
燃え上った痴態で釘付けにさせた。

夢の中の出来事だから直ぐに忘れられると思っていたが、もし忘れて
いなかったら？

今日の城を回った様子では何も噂されていなかったし、口に出せ
なくてモジモジしている挙動不審な人達も居なかつたけれども、そ
れが原因ならば責任を取るべきだろう。

僕が仮説仮説を立てていると、朋美に歯を立てられた赤瀬は、声にな
らない断末魔を上げて逝ってしまった。

朋美が頬をペシペシしても起きないので気絶しているらしい。

朋美は僕が部屋に居たことに気づいていたらしく、僕の姿を見て
も驚かないで、上着を羽織ってから笑顔で出迎えてくれた。

「何で赤瀬が居るんだ？」

「昨日、御主人様と一緒に部屋に入ったところを見られていたよう
でして、今日の私の雰囲気は少し変に思われて訊ねてきたんです。
初めは取り憑かれたのではないかと心配されたのですが、言い訳
しているうちについ口を滑らしてしまいました、追求が激しくて開
き直って関係を伝えたところ。御主人様に危害を加えようと言っ
てきたので、頭に血が上って拘束したのですが、弱々しく反抗する姿
に理性がなくなっていました」

僕の疑問に朋美は楽しそうに説明した。

抵抗した姿が心の琴線に触れてしまったのだらう。その姿を思い
出した朋美はホウと艶かしい溜息をついた。

……赤瀬……ご愁傷様。

異空間での数日間で気持ち調教良くしすぎたせいだろうか？朋美は僕
のことを主として認識している。だが、赤瀬との関係を見る限りS
の才能もあるようだ。気を付けなければ僕も食われかねないキヲツ
ケナケレバ

取り合えず、口を滑らしたことは後でお仕置き調教するとして、問題
は要らんこと首を突っ込んでしてくれた赤瀬をどうするかだ。

今更ではあるが、騒拉致監禁がれても近所迷惑で困るし、変な噂レスが立つ前
に赤瀬を異空間に招待して、其方で説得をして収拾をつけることに
する。

この異空間の建築物は城を模して作られている。そのためこの部
屋も例外ではなく、元の部屋には無い幻想的に照らす明かりが無け
れば、元の場所と錯覚するぐらいである。

此処ならば、もし暴れて助けを呼ばれても誰もこないし、監禁して説得するのにちょうど良い場所である。(城の幾つかの隠し部屋には大昔から使われているそれ専用の部屋がある)

「それじゃあ夢でのことを覚えていたわけではないんだね？」

「はい。夢の話は出てきませんでした」

赤瀬 眠り姫が目覚めるまでに情報を積めていく。

夢のことを覚えていなかった事は安堵できるが、食い散らかし 後始末に関しては結論が出ていない。

「どうすれば良いと思う？」

「抵抗されないようにペットにしましょう」

迷い無く返された言葉に絶句してしまう。

親友を毒牙にかけた拳句、地の底に落とす行為を推奨するとは良識を疑ってしまう。

真面目に返してきた目を見る限り冗談を言っているように見えな
い。

もしかして狂気に蝕まれたか？だったら精神病院に入れないと。

……この世界って黄色い救急車はあったっけ？

……狂神の材料 話の主演はまだ目覚めない。

7 監禁は犯罪です(前書き)

実験的に書いたものなので中身のない駄文です。
読まなくても次話と繋がらないことは無いと思います。

7 監禁は犯罪です

「おいっ起きろ」

「うっん？」

あっひいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！

やあああああやなっ！こないでっ！いやっただすけてええええええええええ！！！！！！

赤瀬に声を掛けると目覚めてくれたが、僕を認識すると昨日の恐怖を思い出したのか、悲鳴を上げて壁際まで後ずさって震えてしまった。

自分が裸だと気づいてすぐにシーツを掻き抱く。

「明菜は昔からお化けが怖かったんですよ」

朋美が暢気に解説しているが、震えて怖がっているのを安心させなければ話も出来ない。

「今は肉体を持つてるよ」

僕はそう言っ取り付いた人形の手をゆっくりと差し出した。人形の手といってもセックス用に作られているため、体温があるからほんのりと温かいし、柔らかい。

暫くすると恐る恐る手に触れようとしてきた。その姿に鼻をスンスンと鳴らした子犬のように愛らしく感じて微笑ましく思う。

普段、凜とした立ち姿で男前な行動をしているとは思えないほど可愛らしく感じて、意外な一面を見て見直してしまった。

怖がらせて悪戯しようと思ったが、怯えを酷くさせると元の木阿弥なので自重する。

僕の人形の身体を触って、肉体があることを確認した赤瀬は、安堵の溜息をついてから僕を睨み付けてきた。

先程とのギャップがすごく、思わず睨み付ける前の愛らしい姿を脳内ホルダーから引っ張り出して反芻してしまった。

「わっわたしをどうするつもりだ？」

「これからそれを話し合いたいのだけど、取り合えず意見を聞こう。僕としては朋美のことを忘れて関わらなければいいよ」

「朋美のことを忘れられるわけ無いだろう！

何としても朋美を貴様から救い出して見せる！！」

親友のことになると恐怖心も和らぐのか、僕の平和的な妥協案は即座に却下されてしまった。

……どうでもいい案だったけど少し悲しい。

「私はこの機会にペットにすることを勧めします。

私一人では受け止めきれませんし、首輪を使われた場合、隷従された後ならば心の傷が少なく済むでしょう。なにより、私を救って上げるなどという上から目線がキニクワナイ」

「と、朋美？」

朋美の思っても見なかった憎悪の籠った言葉に赤瀬がうるたえた。

一番最後のが本音なんだろうなあ。それにしても首輪か。忘れてたな。

アイスフィーク・クリスタル

世界の意思を使えば問題を解決できるけど、内緒にして置きたいし、使用する義理もない。王宮のやつらに不審に思われないように今のままにしておいたほうが良いのかもしれない。美少女に首輪つて背德的でそそのるものがあるし。

「貴様のせいだ！朋美がおかしくなったのわ！！元に戻せ！！！」

赤瀬がキレて僕のせいになっているが、僕のせいだけじゃないはずだ。……多大な影響は受けていそうだけど。

それにしても、元に戻す。か……

精神に手を加えた場合、行き場を失ったストレスが彼女の精神に悪影響を促す場合があるし、ストレスを無くした様な精神を弄繰り回した状態では、僕の操り人形にした場合と変わらない。多重掛けは厳禁だな。

「聞いているのか？！この変態！！！」

考えに耽っていると耳元でいきなり怒鳴られた。耳がキーンとする。

「クズ！鬼畜！陰険！キチガイ！ストーカー！覗き魔！取り憑くしか脳が無い包茎野郎！！平凡男の変質者！！！！」

女性にあるまじき悪言と女性らしいマシンガントークにズタズタ

に打ちのめされた。

流石に此処まで罵倒されるとイラッと来る。

僕は聖人君子でもMでも分別ある大人でもないの、ここまで馬鹿にされて平然と出来るほど人間が出来ていない。

折角、朋美との仲裁に立って平穩無事五体満足に済ませてあげようとする親切心に唾を吐かれた気分だ。

僕に対する罵詈雑言が終わったら朋美を見つめて顔を崩した。

「朋美い。元に戻ってよぉ」

「私は正常です。それよりも諦めて私と御主人様のペットになりなさい」

赤瀬が泣きを入れて頼み込むが、朋美は頑として受け入れない。逆に愛玩動物になれと命令してくる始末だ。

「朋美を解放しなさい！この糞悪霊！！」

朋美の態度が梃子でも動かなそうなので攻撃対象を僕に切り替えてきた。

僕が朋美に取り憑いてると思っていろいろらしい。

確かに傍から見ると憑いているように見えるだろうが、朋美を乗っ取って操っているように聞こえて自尊心に傷がつく。

「僕は朋美を操ってないよ」

「嘘！朋美がわたしにこんなことするわけ無い！」

説得しようとしたら完全否定された。向こうも意固地になって聞き入れてくれそうにない。

「仕方ありません。身体にいう事を聞かせるまでです」

一寸途方に暮れていると背後に控えていた朋美が前に進み出て、赤瀬の身体に手をかけて撫で回し始める。

「いや！なにをするの」

「聞き入れてくれるように身体に言い聞かせます」

「きゃっ、ちよっやっ」

第二ラウンドが始まってしまったが、赤瀬を説得するための考えを思いつく時間が稼げて良かったのかも知れない。

……暫くお待ちください。

「はあはあはあはあ」

事後が終わって朋美が満足げに離れると、赤瀬が荒い息を吐きながら気だるそうに起き上がる。……今度は気絶しなかったらしい。

……説得するための材料を考えることは失敗した。

目の前で官能的な百合色の世界が広がっているのに集中なんて出来るか！！

交ざりたくても交ざれない、ヘタレの悲哀が分かるもんか！

畜生。ドサクサ紛れに絡めば良かった。

動くたびに揺れる柔らかい白い曲線とか、対比された肌に流れるように広がる黒い髪とか、行動しようと思うと絶妙なタイミングで上がる叫声とか、勇気を持って一歩を踏み出すと入る余地もないほどに荒々しく動く全身運動とか。

何のために雄の機能が付いているんだと訴える美しく淫靡な世界が憎い（滂沱）

繰り広げられた光景が二度目なのに入っていけなかったことが悔しい（血涙）

機先を完璧に制された僕は、情事が終わるまで見続けてるしかなかった。

煩惱塗れの頭の中身を切り替えて、下半身と上半身の温度差を管理して赤瀬に問いかける。

「もう一度聞くよ？朋美のことは忘れるんだ」

「いやだ！絶対に救い出して見せる！！」

強情な赤瀬に朋美が再び背後か回りこむが気にしない。

困った。打つ手が無い。

何でこう、頑固なんだろう？しかも男の僕より、男らしく見えるのがムカつく。

女らしく組み敷いてオカシテクレヨウカ

……先程までの美少女の絡みが頭の中で再生される。
僕の中の野生が目の中の雌獅子を犯せと吠え立てる。

「良い手がありますよ。」

救いの神が訪れた。

僕の中の理性が総動員でケダモノ思考を駆逐していく。

イイ顔の朋美を見る限り、赤瀬には可哀想なことになる予感しかないが、この際だから大抵のことには目を瞑ろう。

此処で手を打って置かないと僕の理性が持ちそうに無い。

赤瀬の大きな胸を玩具にしているが、理性の安全を確保するため、見え無い振りして先を促した。

赤瀬も抵抗することを諦めたのかされるがままにしている。

「私が不当な扱いをしているか実際に経験してみれば良いのです。
そうすれば明菜さんも納得してくれるでしょう。」

チヨット待てそれはおかしいだろう。

此処は閉鎖された空間で、此方には世界アースフイク・クリスタルの意思があるんだ。赤瀬の勝ち目は全く無い。

「んっそれでいいよ」

赤瀬は朋美の手つきに顔を再び赤らめながら承諾してしまった。
思考が鈍ってんじゃないか？

「では交渉成立ですね。」

「へっ、やっやめええ」

朋美の目がキラんと光ったかと思うと三ラウンド目が始まった。

……今度は僕も交じれると良いなあ

7 監禁は犯罪です（後書き）

六話の最後が多かったので切り離し、没にした推敲を付けて、肉付けしてみました。

一場面で一話を使うのは初めてなので大変でした。

8 地下からの足音

世の中にはどうにもならない事が多い。
ならば、これもそういうものだろうか？

王城の外れにある物見の尖塔の上で、王宮内で響く悲鳴をバックミュージックに、地下神殿への隠し扉から湧き出る怪物の群れを眺めながら哲学的なことを考えてみた。

化け物共の形状は人型。胸から上は幽霊のように白く半透明で、頭は苦しんだ顔の人間。胸から下は影のように真っ黒で、腕や足の大きな鉤爪で攻撃してくる。移動速度はゾンビ並みに鈍い。

僕が地下神殿から這い上がるときに何度か見た敵である。最初は悪霊と勘違いしていたけれど、見た目の割りに強くなかったと記憶していた。遠距離、中距離から攻めれば簡単に殲滅できるだろう。

アースファイク・クリスタル
世界の意思で名前と能力を確認してみると名前は嘆きの訪れ。名前だけは仰々しいが、鉤爪での直接と低レベルの魂砕きの咆哮を行うとなっている。能力値的にはゴブリンよりも弱い。

適当な幽霊に憑依して存在を保っているだけなのか、霊体のランクとしては幽霊より上だけと悪霊より下である。というか通常の武器でダメージを受けている時点で霊体の分類に無い。

原因は何か？

答えは決まっている。魔神である。

アースファイク・クリスタル
地下神殿で世界の意思を貰ってから一週間も経っていないし、そんな短い時間で王都から民衆を脱出させるなんてなんてクソゲー？

というかもつと封印の維持の時間を持つとけよ。とか、空想の封印装置に詰なつてみたが、世界アイスフレイク・クリスタルの意思を貰った時点で幽霊だった僕は、魔神に関する一切放棄しているんで誰が死のうと関係無し。目に見える範囲で女性だけを助けているけど後は放置している。雑魚程度にやられる騎士達では、ボスが出たら瞬殺されるのが目に見えているし。

やっぱり、鍵は勇者か？

現在、朋美黄蓮寺と明菜赤瀬は別行動中。

異空間から出て、それぞれお仕事訓練に行っている間に騒ぎが起きてしまった。

二人とも化け物に応戦中なので、世界アイスフレイク・クリスタルの意思を使った覗き窓を使用して応援している。

もちろん、重要なところでサポートをしているが、ハッキリ言つてこの程度の困難は退けて貰わないと困る。

サポートは相手をコケさせたり、敵の攻撃がクリティカルで当たるのを防いだり、傷の回復速度を速くしたりするだけの裏方作業である。

「松葉シヨウバ！」

朋美は掛け声とともに短槍で鋭い突きを連続で放った。余りの突きの多さに残像で松の葉のように無数に見える。

蜂の巣にされた敵は悲鳴を上げながら消えていく。

「お見事です。黒の姫様」

「さすが、朋美様」

刀術の弊害だろう。

武器は西洋剣なのだが動きは日本刀の動作なのだ。

西洋剣は叩き切る目的で作られているのに対し、日本刀は斬り裂くことを前提に作られている。これでは折角の武器を持っていても十分に活かされていない。

大方、この戦いが始まる前までに日本刀の癖が抜けきれなかったのだろう。

高々数日で数年の癖が抜け切るとは思えないが、何時かへまをしそつで見ている怖い。本人もそのことが分かっているのか神経を張り詰めて鬼気迫る感じだ。

……この戦いが終わったら日本刀を削ってあげよう。

他にも問題がある。

明菜のサポートをして分かったのだが、明菜が苦戦しているところを助太刀に行くと困惑とありがた迷惑な顔をされるのだ。

最初の違和感は逃げ遅れた下働きの娘を助けてあげた時に感じた。明菜が敵を倒して助けた後、明菜の顔を見て一瞬だが嫌そうな顔をしたのだ。

下働きの娘はお礼を言っつてソソクサと逃げて行ってしまったので真相は分からない。

ある部隊が乱戦になっているところを助けに行つて、戦いが終わると明菜と一緒に行くとうとしないで、隊長格が部下を引き連れてすぐに離れようとする。

流石に明菜も何か違和感を持ったようだ。

……まるで何かに恐れている？

明菜自身に問題があるなら戦闘時に背後から襲うなり、敵対行動に移ってもおかしくないはずだ。だが、明菜と剣を並べて連携するような動きまで見せた。ということは明菜自身の問題ではなくて、明菜に関わることで自分の身に不幸が降り注ぐことを避けるためのものだ。こんなことが続けば、今はまだ大丈夫かもしれないが明菜の心が折れるかもしれないな。

遠くで兵士達が喋っているのを傍受した。

「おいつ一人にしているのか？」

「首輪してるから大丈夫だろ。それよりも急ぐぞ！」

首輪？そつえば首輪のこと調べてなかったな。

隷属の首輪

名称：隷属れいぞくの首輪くびわ

形状：大型犬用の首輪

用途：奴隷を主の命令に従わせるために使用する。

使用方法：奴隷の首に嵌め、対になる主命の指輪にて命令する。

説明文：元々は他国の捕虜や犯罪者を従わせるために作られた魔具。補助として言語付与機能が内蔵されている。勇者抑制用として使用されているが、勇者に備わった能力によって無効化される場合がある。

……予想の範囲内の品物ではあった。

主命の指輪はイザという時の切り札に使われるのだろう。白峰はお姫様のペット状態だから良いとして、朋美の指輪は奪った。朋美の周りに男が集まるのは能力か？黒淵の首に首輪はあっただろうか？一番危険なのは明菜か。取り合えず首輪の隷属機能を壊しておくか。

思い立ったが吉日。すぐに世界アースライク・クリスタルの意思を使用して、言語機能に問題が無いように壊しておく。

その事に気づいた様子も無く、明菜は気を張りながら歩みを進めて行く。

何処となく嫌われているのを察しながらも、それでも孤独に耐えながらフラフラと王城の中を彷徨い、人助けをしていく明菜。

本来ならば此処で彼女に声を掛けるべきなのだろう。独りよりも二人の方が気が紛れるし、嫌われていない人がいるだけで安心できるものだ。

だが、今は戦場だ。安心や気の緩みは死を呼ぶ。それに彼女が何の陰謀に巻き込まれているか分からないまま手助けしても根本的な解決にならない。ここは心を鬼にして知らせないで裏から支援するべきだろう。

朋美の様子を大まかに眺めながら、僕は明菜を重点的に補助していく事を決めた。

それは予兆なのだろう。

朝と昼の中間あたりから始まったこの騒動は昼と夕方の間の時間に一時的に止んだ。

化け物達が地下から這い上がってこなくなつて、兵士と騎士達が気の早い歓声上げているが、臆病な兵士や力ある魔術師達ならば、まだ終わっていないことが分かるはずだ。

不穏な空気は晴れずに地下から押し掛かるような力を持った何か近づいてきていることを。

大きな力を受けて城が鳴動していく。

先程までは震度1ぐらいの揺れだったのに、今では立っていられないほどの振動になっていた。

揺れが頂点に達した時に中庭の地中から土砂が噴出し、間欠泉のように土が舞い上がる。

土が取り除かれた穴から黒い人影が空に向かって飛び上がった。

僕は中庭から城の上空に飛び出してきた人影に目を向ける。

顔は極普通の少年の顔立ちだが凶悪に歪められていて、上半身を前の世界で着ていたようなデザインの服装を纏って、下半身は黒い魔獣のような禍々しい足と尻尾を持っている。

なんか見たことのある顔だ。

何処でだろう？

最近?.....違う。

前の世界?.....多分そう.....鏡の中で.....

.....

あれ?僕の顔?何で?

無意識に近い行動でアースフィクを起動させて調べる。

.....次元の狭間にあつた肉体に憑依する形で力を増大させた?

次元の狭間?僕の上半身?

理解していくうちに驚愕に彩られていく。

あれっ!僕の身体つつっ!!!!!!

9 魔神復活

魔神が空を漂い、地下から嘆きの訪れ共が巢を崩された蟻の如く湧き出てくる。グリーファー

僕が呆然としている間も魔神は哄笑し続け、グリーファーは城を蹂躪し続ける。

覗き窓に目を向けると明菜赤瀬は非戦闘員を誘導中。朋美王蓮寺は騎士達と奮戦中。勇者は当てにならない。上空にいる魔神を相手出来るのは実質僕だけだろう。

魔神と話し合い出来るか？

自意識はありそうだけど、あんな凶悪な貌しているのとしたくないなあ。それに普通だったら封印していた場所はストレス発散に壊すよね？

ならば、魔神を倒せるか考えてみる。

現状の自分は聖霊？で魔神の2ランク下。とてもじゃないけど無理。

アイスライク・クリスタル世界の意思を使うとしても、過去の人が使用しなかったかというアイスライク・クリスタルと使用して空間の狭間に封印したのだろう。つまり、世界の意思を使用して倒すのは無理ということになる。いや、無理ということにも早合点しすぎか？消滅させるような使い方ではなく、封印のほう効くということは絡めてなら効くということだ。ならば呪詛系で力をじわじわと奪い取る方法はどうだろう？

封印と呪詛を合わせる感じで魔神もこの世界から生まれたんだから、力を世界全てに還すようにする感じで。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

「!

雄叫びと共に白峰が魔神の居る所まで突っ込んできた。空を飛べるなんて魔法だろうか？

まあいい。彼を囷にして呪いを掛けるか。

いかにも白峰が掛けたように見せかけて、呪いが掛かっているの気づかせないよう、隠蔽性抜群な衰弱式にする。コツは自己回復よりも少しだけ衰弱が多いぐらい。

あつ叩き落はたとされた。

ハエが叩き落とされるように、まともに食らった勇者は一直線に元の飛び立つ前の場所まで強制送還される。……ペシッという擬音が聞こえてきそうだ。

ギャグのような瞬間芸に啞然とする。

一瞬で終わるなよ。もう少し持たせられないのか？呪いは無事に発動できたから良いものの勇者として失格だろ？

でも、白峰が粘ると僕の身体が傷つくのは嫌だな。

元の世界で生き返る当てはないし、現在の霊体状態でも満足しているから元の身体がどんな事になっても構わないのだが、せめて大切に使うて欲しい。戦うと身体がボロボロになるから、せめてどこかで野垂れ死んでくれないかな。というか僕の身体を返してくれ。

僕が現実逃避気味に願望を妄想していると、魔神が下で煩くしている騎士達に目を付けた。

勇者が蛮勇芸人魂がを奮わなければ気にもされなかったはずだ。つくづくあいつは周りを不幸にする。

下に降りた魔神が嘆きの訪れを巻き込んで騎士相手に無双してる。
魔法とかの遠距離系攻撃で殲滅しないのは、ストレス解消に楽しんで
いるためだろう。

人身御供
生贄役、ご愁傷様。せいぜい時間稼ぎ頑張ってください。

あれ？魔神さんに構って貰ってるの朋美ところに憑いていた騎士
達じゃないの？

朋美がいないな。何してんだろ？

覗き窓で朋美の様子を伺うと、お姫様付のメイドさんと話し合っ
ている。

場所的にこの場所の真下か……行ってみよう。

「……では、御機嫌よう」

メイドさんはスカートを摘んだ完璧な礼儀作法でお別れをして立
ち去ってしまった。

……しまった。覗き窓で聞き耳立てときゃ良かった。何を言っ
たのか分からない。

僕が自分の行動に軽い後悔を覚えていると、朋美がフラフラと歩
き出した。

青ざめた顔で、虚ろな瞳で、ただ歩き続ける。

何を言われたのか分からないが、現在の状態がまともな精神状態
じゃないのは見れば分かった。

声を掛けている僕が分からないほどのショックを受けたみたいで、
周りが見えてないらしくてグリーンファアの群れに無抵抗で突っ込ん

だときは焦った。

周囲の状況に反応しない状態にも変化が訪れる。

『足元にいる奴等どけええっ！』

拡声器を通した白峰の言葉が響き渡る。

目の前の城の中から巨大な人型がぬうっと現れた。

……ロボット？

ラーゼ オンやエヴァ ゲリオンのようなすつきりした形では無く。体はダ バイン、顔は巨神 ”ーグ、外殻は大 神というよく分からん代物だ。(守護神の顔を持った埴輪の身体を持つ二本足で立つ虫?)

日本人の子供心に撥られるような、世界を誇るジャパニメーションの人型兵器が目の前に存在している。

心躍る状況なのに白峰が操縦していると知っただけで何でこんなに嫌な気分になるのだから。

「ひかる……」

朋美がフラフラと前に進み出る。

どうやら彼女はまだ白峰のことを諦めきつていなかったらしい。

それだけ僕の存在よりも彼の存在のほうが彼女の中では大きかったのだろう。つまり……僕は振られたのか？

「行くな。」

「行くな朋美！」

僕の制止の声も聞かずに朋美は前に進み出る。朋美が前に進むほ

ど僕の中の喪失感が大きくなっていく。朋美が僕のモノでは無いことに気づかされる。

不意に白峰が乗るロボットがグラリと傾ぐ。

巨体はそのまま僕らとの間にある建物に倒れ掛かった。

『うおっと』

白峰の緊張感の無い声と共に建物が崩壊していき、瓦礫が僕らの頭上に降りかかってきた。

僕は咄嗟に動きそうにない朋美を後ろに引っ張って回避しようとした。

土埃の晴れた視界に映るのは両足を瓦礫に挟まれて気絶した朋美の姿であった。

『姫さん。何をしてるんですか』

『ごめんなさいヒカル』

白峰の叱り声にお姫様の悪びれない謝罪が答える。

『よっ』

掛け声と共に建物に埋まった体を引き抜いていく。微妙に支え合っていた建物の壁も崩れだした。

当然、僕らの頭の上にも瓦礫が降り注ぐことになる。

僕は朋美の足を引き抜く時間が無いと感じて、アースフィクで朋美の足を切断すると急いでその場から朋美を引き上げて離脱した。

数瞬遅れて先程よりも大きい瓦礫が僕らがいた場所に降り注いだ。

太ももの位置で切断された足の切り口はアースフィクのおかげで奇麗だが感染症が怖い。

そのまま魔神に向かっっていく白峰を横目に朋美の止血を急ぐと朋美を異空間内に送り込んで時間を止めることにした。

朋美の治療をして上げたいのだが、魔神との戦闘が気になるため安全な場所にお引取り願う。

朋美への思いが冷えていくのが感じたのもある。今の精神状態で完璧な治療が出来ないと感じたのもある。

……唯、僕が代替用品という現実から目を背けたいのかもしれない。

白峰が魔神と対峙する。

魔神が牽制で放った魔力弾の一撃は、装甲に光の紋様が浮かび上がると弾かれてしまった。

どうやら対魔神用に製作された代物らしく、小さな攻撃など防いでしまいそうだ。

白峰が乗る巨人がその鈍重な巨体には似合わない素早さで魔神に近づくと振りかぶった拳を叩きつけた。

白峰の攻撃によって魔神が吹っ飛んでいく。

し・ら・み・ねえええええええええええ

僕の身体に何しやがる。てめえ躊躇無く攻撃しやがったな。着ている服を見て元の世界の人間が関わっているとは思わんのか。馬鹿野郎！

あああでも魔神は倒さなきゃいけないし、白峰が僕の身体を傷つけるのは嫌だし、魔神のやつ何まともに食らってんだ白峰なんて一捻りにしやがれ！でも白峰が魔神を倒さなきゃいけないし、ああああああくそっ心が引き裂かれそうだ。

悪態と二律背反に頭を悩ませている間にも戦いは進んでいく。

白峰の体当たり攻撃が外れて吹っ飛ぶ城壁。白峰が移動の着地点を見誤って崩れる塔。空中戦で白峰が撃った流れ弾で火の手が上がる街。白峰の無差別広範囲攻撃で阿鼻叫喚あび叫喚に陥る人々。

魔神が倒される前に王都が崩壊するのではないかと思うような光景だ。

というか白峰が魔神じゃないのか？まあどうせ勇者だから許されるか、上のほうで情報操作するのだろうけど。

それにしても伝説の魔神が弱く感じるのが気になる。予想ならもっと強いはずだ。

気になるからアースフィクを使用して調べてみるか。

調べた結果、前の戦いにはアースフィクは使われなかったらしい。魔神が既に封印された後で地下神殿や召喚装置を作り上げただけで、魔神との戦いには間に合わなかったようだ。

どうせ、結界の動力にアースフィクが使用されなかった理由も、動力だけのために使用するのが勿体無いということだろう。

それと今の魔神は過去と比べようが無いくらい弱っているらしい。昔は恐怖や信仰などで、邪神に匹敵するぐらいのランクがあり、存在力サイだけなら神を超えていたと言っても過言では無かったそうだ。しかしながら、力を削られ、空間の狭間に落とされた後は、人々もその存在を忘れていき、消滅を待つばかりであった。

其処に上半身だけとはいえ、寄り代になる身体が流れてきたので、憑依して融合することにする。空間の狭間に流れてきたのは勇者の肉体で、物質存在量を持ち、霊体を安定させるにはベストな身体である。かくして、消滅寸前の存在を保つことに成功したのだった。そして、結界が破れて外に出ることが出来たわけだ。

つ・ま・り、アースフィクを使つての魔神への攻撃は効くということだ。過去に戦つたからアースフィクが効かなかつたんだという思い込みで動いていたわけで、情報の大切さを痛感させられる出来事だった。

然う斯うしている間に僕の可愛い上半身がボロボロにされていく。いかん。早くしないと僕の素晴らしく普通の肉体がズタボロになってしまう。

僕は慌てて自分の肉体を保護すべく動いた。

まず、魔神を入れておく空間。何も無い異空間を用意する。次に魔神が倒されたことにするために一芝居打つ必要があるだろう。…此処はやはり爆発オチで。

悟らせないために慎重にタイミングを計る。

白峰が大技を放つて満足させるには、魔神に隙を見せる行為が必要で。隙は行動不能か？一瞬の遅れか？

突然の行動不能は不審感を与えるから、少しずつ瞬間的な硬直を増やしていこう。

……

ぐっ我慢。我慢するんだ。此処で魔神にシールド張つて肉体に傷がついていかないと不審に思われる。

僕はメタクソにされていく僕の肉体を見ながら、魔神に加勢したくなるのを必死に堪えていた。

……

既に僕の身体は自動車に引かれてドブに捨てられた操り人形みた

いになつていけるけど、態とじゃないのかと疑つてしまふほどタイミングを外しまくりやがる。勇者ならタイミングを外すなアホく

既にタイミングを五十五回も外しているんだ。一番長い硬直時間を与えてやるんだ。もう決して外すんじゃないぞ？外したら魔神を操って逆転サヨナラ満塁ホームランを決めてやる。

僕の怨念じみた願掛けが通じたのか、やっと必殺技を出すようだ。

やっと時が来た。

長かった。

この時を幾星霜待ち望んだことが。

まさに一日千秋の思いだった。

ついに、対にこの時がきた。

なんか厨二臭い必殺技名を叫びながら魔神に突っ込んで行く白峰を見ながら、最初の時みたいに一撃死するといいなと頭の片隅で考えてしまった。

そんな悪魔の誘惑を乗り越えて、魔神の身体に白峰の巨人の拳が当たった瞬間を狙って計画を動かす。

まず、エフェクト効果で魔神の内部から閃光を発しさせる。太陽拳みたいなものだ。

次に、魔神を準備していた新しい異空間に移動。

最後に大爆発を起こす！！

……あつ爆発量間違えた。

閃光後の大爆発は空中であつたにも関わらず地表にクレーターを残し、中心部近くは家の土台だけになり、町の半分を瓦礫に変えてありとあらゆるモノを根こそぎ吹き飛ばした。

城の上部が残っているのが不思議なくらいの爆風が吹き荒れ、揺り返しの風で吹き飛ばされた粉塵が爆発の中心に戻っていく。

こうして一国の王都を壊滅に追いやった魔神との対決は終わりを告げたのである。

10 治療

魔神との戦いの後すぐに異空間内に引きこもって調べ物をしていった。

治療した場合のデメリットについてである。

結果的に調べといて良かったと感じている。そのまま治療していたらえらいことになっていた。

最初にパラメーターを見た時の物質存在量という存在。

物質存在量とは元の世界の物質存在の量。簡単に言うと身体の質量である。

この世界で身体の一部が欠損すると物質存在量が減る。この世界で欠損した身体を治療しても物質存在量は元に戻らない。つまり、この世界で手足を無くして治療で手足を生やしても、元の世界では物質存在量が欠損した状態だから、身体の質量密度に隙間が出来てしまう。酷い状態だと身体の構成する原子が隙間だらけで、身体の維持が出来なくなり衰弱して死んでしまう。

普通に治療して手足を生やした場合、元の世界に帰れなくなってしまうのである。

他の人の物質存在量を与えて物質存在量を増やすことは出来ない。拒絶反応が出てしまうのである。

エロゲのように房中術で回復も考えたが、別の物質存在量を作り出すだけのようだ。

考えてみれば妊婦が胎児を身体の中に入れてられるのは羊水という保護があるからであり、子供は親のクローンではないので拒絶反応が出ることが普通の考えである。

つまり、性行為は精神的な一体感による回復はともかく。物質的には一体になれないという当たり前の考えであった。

結局、瓦礫でつぶれた足を持ってきて、足りないところを身体から持ってくるという面倒くさい作業をすることにした。（足が無い場合のシミュレーションをしたところ十歳以下の体型になることを確認。流石に可愛そうなので足を拾って来た）

僕は四大家族の次男として生まれた。

中流家庭に生まれ育って自由に出来るお金は無いけど過不足無い幸せな家庭。

子供の頃から馬鹿なことをしていた記憶しか無いけど、僕以上に馬鹿なことをしていたクラスメイト達によって、結果的にその他大勢のモブキャラに堕ちている現状。

リーダー役になりたいと頑張ってみたけど、カリスマも無く、行動の根拠も無い僕に務まるはず無く。気がつけば壁の染みよりも存在の無い人畜無害なイイ子ちゃんに成っていた。

つまらない人生の中で心を埋めていたのは学校の有名人への憧れと嫉妬だった。

僕が唯一誇れるものが他人に迷惑を掛けない事というくすんだ毎日。

そんな時に訪れたヒーローになるチャンスは人生の転機だったの
であろう。

良いか悪いかは別として。

彼女達を助けなければあの子はもうどうしていただろう？

……益体もないことを考えて現実逃避をしてしまった。今は治療
することを第一に考えなくてはいけないのに。

物思いに耽ってしまった原因は朋美の治療をするのに虚しさを感じ
ていたからだ。

振った彼女をなぜ治療するのか？

足が無いだけなら適当に付けてほっぽり出しても、自業自得だし構わないのではないのか？

僕はなんてお人好しなのだろうか？これが惚れた弱みなのかと思いつながら、朋美の修復作業を続ける。

心の微熱は冷めていたが彼女を見捨てるほど嫌いでは無いからだ。

ローテンションな治療であったが、丁寧に作業したおかげで朋美の身体が元どおりになった。

粘土を捏ねる様な無茶な人体改造をしてしまったが、元の世界に五体満足で帰れる可能性が出てきたので我慢して貰いたい。

……若干、足りないものを身体から補充したせいか、二、三歳若返っている感じになってしまったが、素晴らしく美しい二つの頂はそのままにしておく。

本当は身体の余分な部分から持ってくるのが一番なのだが、仰向けになっても崩れない奇跡の物体を許可無しで無くしてしまうと殺されそうなので、身体のおちこちから少しずつ集めた結果、若返ってしまったただけなのだ……時間凍結の解除後に発熱と身体の痛みが出るが我慢して貰おう。

治療を終えて朋美の時間を元に戻してやる。後は身体の回復力に任せるだけだ。

朋美の意識が戻るまで異空間にあると思われる白峰が乗っていたロボットと同型の機体を探す。

お城の中から出てきたということは王都を丸ごとコピーしたこの異空間内にも保管されていることになっているはずだ。暇つぶしに解析するには最適の素材だろう。

白峰の奴は何処も怪我を負うことなく生きている。主人公補正だ

か勇者補正だか知らないがピンピンしている姿は不条理を感じ得ない。

まあ一応、奴が何やってるか確認してみるか。

……王宮の広間で豪華な料理と煌びやかに着飾ったご婦人方に囲まれて、お偉いさん方と歓談しているのが見える。

町の中がグチャグチャになっているのに良くパーティーが開けるな。

……どうやら上流階級の方々は下々の生活には目が入っていないようだけど、革命する人いないのかな？

まっいつか。所詮他人の国だし、すぐに去る国なので介入しようとも思わない。うえに訴える人がいないということは、其れなりに幸せなのだろう。

白峰の馬鹿面のついでに明菜の様子でも見るか。

……手枷を嵌められ、鎖に繋がれて引き立てられている。

……何やってるんだ？捕まった？……グリーファ嘆きの訪れとの戦闘時にメイドとか兵士に避けられていたのと同様関係しているのか？
考えても分からんけど助けといたほうが良いな。

僕が明菜の救助を決意して、朋美の様子を診るために顔を向けると、朋美が目を覚まして空中に出してある覗き窓を覗いていた。

しまった。白峰の様子は彼女に刺激が強かったか？

僕は慎重に様子を伺った。

だけど、朋美は僕の顔を見つめているだけで変わった様子は見られない。いや、目じりが下がって頬を染めている。

彼女の顔はこの世界に来る前の凜とした雰囲気とは変わって、柔和で吸い込まれそうな優しい笑顔だったが、僕の冷え切った心には

細波しか与えなかった。

「明菜を助けてくる。待っていてくれ」

僕の言葉にハイとか細く返事を返してすぐに眠りに入った。

身体をあちこち弄くった代償で、体力を削られて熱がある筈なので起きているのも辛いのだろう。素直に横になると目を閉じてくれた。

彼女の顔を見るのが辛い。

寝顔はまだ我慢できたけど起きていられると心が締め付けられそうだ。

外の空気を吸って頭を冷やそう。そしたら彼女を元の世界に戻す方法を考えなくてはいけない。

僕は朋美から逃げるように異空間から抜け出した。

.....orz

僕は目の前に広がる一万人を超える女性達に対して途方に暮れていた。

表通りから一歩踏み込んだその場所は、今だかつて無いほどの熱狂をはらんでいた。

原因は昼間に起こった魔神騒ぎである。

最後の大爆発によって家を失った人々は奴隷狩りに狩られた。否、狩られている。

この国に深く根付いた奴隷制度は自国民に牙を向けるのに躊躇をしない。それゆえこの国に住む人達は力を持つか人の気配に敏感になつて防衛して来た。だが、街が瓦礫にされたことでその均衡が崩れた。強欲な奴隷商人達は配下の屈強な部下達を使って親の無い子供を狙い、家を無くして愕然とする女を狙った。

かつて絶望と諦観が支配していたこの場所は、憎悪と悲鳴を伴つて膨れ上がっている。

<対象、首輪をした女性>

明菜を助ける過程でそのことを知った僕は、王都で奴隷にされている女性全てを異空間に連れ去ることにした。

木を隠すなら森の中。人を殺すならテロと共に。の感覚であるが、少女一人を隠すには丁度良い目くらましと考えたのも確かだ。

奴隷になつた女性の中でも色々な立場のものがある。明菜の様に鎖に繋がれた人達も多くは無いのだろう。彼女達の解放の意味を込めて一つの場所に転移させることにする。

結果、異界にある王都の一番大きい広場に一万人以上の女性が集合することになった。

そして僕は後悔することになった。

街をふっ飛ばした責任は僕にもあるし、現代日本で生まれ育つたからには奴隷を見て見ぬ振りも出来ない。だが、安易に手を差し伸べてはいけないのも確かである。

結果、一万人以上の女性奴隷を前にして、彼女達への責任を感じて現実逃避を敢行していた。

猿の浅知恵。考え無し。その場凌ぎの脳筋野郎。認めたくないものだな若さゆえの過ちとは。……色々な言葉が僕を責め立てていくが、助けてしまった以上簡単に放逐してはいけない。

いつまでも悲嘆に暮れるわけにも行かず、取り合えず彼女達の衣・食・住を手配することを考える。

まず、住。これは適当な空き家に住んで貰えば良い。後で衛生のために工事と区画整理をする必要がある。

次に食。アースフイク・クリスタル世界の意味を使用して食べ物を生み出すことが決定。当分、僕の仕事になりそうだ。まあそこ等にあるものをコピーするだけなんだけどね。

最後に衣。これに関しては適当に終わらせることが出来ない。布から作ると時間が掛かりすぎるし、僕が考えて配るとセンスが無いと批判されかねない。実際考えるのが面倒臭くて白の貫頭衣が良いかと思つているところだ。

認証目印は首輪にして……

……メイド服も捨てがたい。

傷つけられないように強化服に……

……これだけの人数だと個性や役割が出来るから特化型にして。

夢想の狭間に陥つて気がつく足元の女性達がざわめいている。

ひとまず広場で待つている避難民を待たせるわけにいかないので高速思考モードに入って時間を短縮した。

まず、力を与える証として現在女性達が付けている隷属の首輪を戦乙女の首輪に変更させる。

この首輪を利用するのは自分達が僕に仕えているということ戒める意味合いがある。

もちろん首輪を外せば自由になれるが僕の加護も失う。

僕の加護、首輪の機能としては、命令受諾機能を外して翻訳機能をそのままにしておく。そして新たに十代の美少女化（不老）、肉体破損による霊体への深化（不死）、クラスシステムによる戦闘補助、クラス衣装の改造と衣装データの共有化を追加した。

十代美少女化は僕の下に就くことへのご褒美だが、霊体化は肉体を損傷した時に起こる弊害で物質存在量が無くなるのと同じように肉体が段々霊体に近づいていき、最後には僕の力で支えて上げなくては存在することも出来なくなってしまう。つまり、僕が神で彼女達は天使という関係になるのだ。

クラスシステムについては、首輪を付けなければいけないという制約とこの世界の法則を乱す可能性がある以上、道具による身体強化どまりであるが、それなりに特色を付けてみた。

ノーマル状態で首輪を付けただけだと、翻訳と不老不死、衣装の変更しか出来ないし、着れる物も下着と白い貫頭衣の寂しい状態になってしまう。

だが、基本クラスの〈フェンサー剣士〉、〈グラップラー格闘家〉、〈メイド侍女〉、〈アルケミ錬金術師〉になると着る物の幅が広がり、補助技能を使用することが出来る。

補助技能を全てマスターしないと見習い状態でクラスの恩恵を受けられないが、マスターした場合は能力と補助技能の強化、服装の改造化ができるのだ。

もちろん基本クラスの他に上位クラスや隠しクラスもあるのでゲーム性も楽しめる。

上位クラスにするには僕への忠誠度を入れて忠誠心の無い人には大きな力を与えないようにする。

犯罪を犯したものは首輪の恩恵を受けられないようにして元の姿に戻るよう設定した。

衣装は見習い状態では生地が悪いし、改造も出来ないが、ク
ラスのレベルを上げると質の良いモノに変えて改造も派手にするこ
とができる。例えばピンク色のシルクのメイド服でアンミラ風にする
ことも可能である。

服装のデータ交換も受け取る側が同レベルかそれ以上の存在であ
れば可能で、同じ服を着たければ同じレベルの人に頼み込めば自分
で服を改造しなくても簡単に着ることが出来る。

女性たるものお洒落に気を使うべしという言葉がある以上、条件
付とはいえ服を手軽に改造できてお金が掛からない（重要）のは嬉
しいことだろう。惜しむらくはアクセサリが無いことだが、それ
はこれからアルケミスト錬金術師の方々に期待することにする。

これだけ僕の力の恩恵が受けられるのにそれを捨てて出て行こう
とする人達は余程の事情があると思われるので、少なく無い金貨を
渡してこの異空間から出て貰うことにする。

狭量な僕は、指導者に逆らうものをこの異世界に置いておく事は
出来ないのだ。

戦乙女の首輪に全ての設定が終わり、思考の流れを元に戻す。

……なんか三日ぐらい経った気がするけど気のせいだろう。

僕の足元には相変わらずの女性の群れ。

これから僕は、隷属の首輪を戦乙女の首輪に置換して一世一代の
大演説をしなくてはならない。

不安でたまらないが彼女達の命の責任を背負うために王になると
決めた。というか考えた末にそれしか方法が思いつかなかった。

僕は間違ったことをするのかもしれない。でも彼女達を守るため
に決めたことだ。

これから千年^{ミレニアム}王国を興すために僕は大きく息を吸った。

10 治療（後書き）

朋美さんの治療において、初めは彼女の両足を直すときに千切れた両足を使わずに十歳以下の体型にするつもりでしたが、余りにも不憫なので止めることにしました。その代わり考えていたプロットが一つ潰れて修正中。

11 白峰光（前書き）

白峰光 side 短いです

王都は現在、曇天に包まれるどころか豪雨に晒されている。

それは比喩でもなく一昨日の朝から降り注いでいる雨が酷いという意味もあるが、魔神襲来後に起こった事件のせいでもある。

女性の奴隷達が突然王都から姿を消したのだ。

目撃者は多くいた。だが、その誰もが口をそろえて気がついたら居なくなっていたと言う。

原因不明で多量の女性達が一夜にして消える。出来の悪い悪夢のようで笑え無い事態である。

王都に住む人々は魔神の仕業ではないかと騒ぎ、土砂降りの雨を怖がるかのように家の中で震えていた。

王都の最下層労働者である奴隷達がいなくなると回らなくなる仕事は多い。

普段押し付けていた仕事を自分でしなくてはいけないものだから効率は悪くなる。

性処理の相手が極端に減ったものだから平民女性への暴行被害も多くなり、犯罪も増加していき治安の悪化を招いていた。

彼女達がいらないことで吐き出される貴族の鬱憤は平民に当たられ、平民は不満を沈殿させ貴族との溝を深めている。

王宮の中も暗い雰囲気だが、俺の前で背中を向けているこの女は恐怖とは無縁なのか気炎を上げていた。

「まだ見つからないの?!」

イラついた声が定期報告に来た侍女を叱咤する。この処の俺のお姫様の機嫌は悪くなる一方だ。

「申し訳ありません。片方は奴隷商に渡った事は確認しましたが、もう片方の遺体はが暦の下からは見つかりませんでした。ですが、かなりの血が現場に流れていましたので、怪我をしていたら遠くには逃げられないはずです」

パンツ

「そんな説明は聞きたくないわ！！」

言い訳じみた説明に姫さんが侍女の頬を張った。

おいおいおい。いくら旨くないからって八つ当たりは良く無いな。報告に来た彼女のためにも姫さんの機嫌を取っておくか。

大方、朋美を苛められなくてストレスが溜まっているだけだろう。周りのためにもストレス解消させておくか。

「お姫様。女性がそんなに険しい顔をするものではありませんよ？」

お姫様の背後に立った俺は幾度も重ね合わせた身体を抱き上げてやる。

俺の愛撫によってすぐに身体を預けてきた。

くっくっくっく。こいつももう俺無しにはいられないな。

「ヒカルウ。こんなところでダメですわ」

俺はお姫様の甘い訴えを無視して報告していた侍女に下がるように合図を送った。

侍女さんは俺の意を汲み取って速やかに退出する。

姫さんが何か言いたそうにしたが、身体を弄って行動を封じた。

この世界に来てから手に入れた愛玩動物を弄りながら前の世界の仲間達を思い返す。

幼馴染の弥彦^{黒淵}は城の一室で行われた儀式で闇を発現したため、身の危険を感じて夜陰にまぎれて城から出て行ってしまった。

俺みたいに光を発現すれば良かったのだが忌み嫌われる闇ではしようがない。

唯一の救いは俺と同じように能力で首輪の強制命令を壊せたことか。

幼馴染として心配だけはしておこう。男だから助けてやら無いが。

赤瀬^{明菜}は弥彦が通っている剣術道場の一人娘で余り接点が無かった。近寄ろうとすると弥彦の影がチラつくので踏み切れなかったのだ。話によると朋美^{王蓮寺}の家系の分家筋に当たると嬉しいからその接点から狙っていたが中々機会が訪れなかった。

あの見事な胸を一度でいいから堪能してみたかったが、奴隷として売られてしまっただけでは手が出しようが無い。公爵家と王家の確執に巻き込まれて奴隷に落とされたのは痛かった。

今はまだ王様に逆らうのは得策では無いだろうから、機を見て助け出して恩をたっぷり売って味わうとしよう。

朋美は魔神との戦いの時から姿を消しているらしい。お姫様が必死で探してくれているが見つからない。

彼女は小さい頃に助けた一人だが、良い所までいくと必ず邪魔が入る鉄壁の女だ。

彼女自身はもう既に堕ちたも同然でキスマでしただが、それ以降に進むとなると必ず邪魔が入ってケチがつく。

この歳になつての彼女の美貌は素晴らしいもので、あの肢体を汚しつくしたい衝動を堪えるのにどれだけの精神力を消費したか壮絶に比しがたい。

あの時助けた後も二人きりでいいことしようと思策していたのに、この世界に連れてこられてご破算になってしまった。本当に運が無い。

そういえば朋美を助けたときにひ弱そうな男が彼女を守るように立っていたな。

俺が助けに入って朋美の祝福を受けていると悔しそうにしていたのは傑作だった。

誰があんなチエリーボーイに見せ場を作ってやるかってんだ。モブはモブらしく家の中でマスかいてればいいんだ。

男を思い出して嫌な気分になったので姫さんの心地よい柔らかな身体を味わって不快な記憶を消していく。

気がつくと姫さんは荒い息をついてグツタリしていた。

しまったやりすぎたか。

まあいいや。姫さんが耐えられないんだから仕方ない。先程の侍女に慰めて貰うか……久しぶりに青い髪の召喚の巫女を味わうのも悪く無いな。

俺はそんなことを考えながらお姫様をお姫様抱っこで愛の巣に連れて行こうとしたが、突然の浮遊感に足を取られてしまう。

地震？！

地震大国日本で生まれ育った俺は地震の可能性を思いついたが即座に否定した。

地震にはつき上げるような振動が無くて、ただ落下するような浮遊感があるだけだったからだ。

俺は崩れ落ちていく城と共に必死で腕の中のお姫様金縛りを守っていた。

地下神殿の崩落。

長い年月を支えてきた魔力が切れた事と魔神が暴れて天上部を支える支柱を壊された事、そして長雨による地下への浸水によって地上部を支えきれなくなったことが起因した大崩落であった。

崩落は地下神殿の広間の真上にあつた天空召喚陣の山はもちろん、すぐ側にあつた城の主要部分も巻き込んだ。

長い年月の間栄えたオルスターン神聖王国は、魔神復活により王都の街の大半が瓦礫に埋まり、地下神殿の崩落によって城が崩れ去ったことにより中央が機能しなくなつて、隣国のリシヤク国の反抗を支えることの出来ないまま滅びを向かえることになる。

12 黄蓮寺朋美（前書き）

黄蓮寺朋美 side

12 黄蓮寺朋美

私こと王蓮寺朋美は、前の世界の出来事が色あせるほどの毎日が充実した日々を送らせて頂だいております。

私が元の世界に居た時の生活は、学校と稽古、修行に明け暮れる毎日でした。

友達と遊びに行くことなど月に一回あれば良いほどだと記憶しております。

恋心を抱いていた光と一緒に遊べるのは二時間だけとかの日もありました。

今考えると、毎日が目まぐるしく、鮮やかな灰色の日々でした。

御主人様と初めてお会いした時は、同じ学校に通っている分家の赤瀬明菜さんと一緒に山籠りのための買出しをしている途中でした。品行の良く無い方々に絡まれていたときに、穩便に助け出そうとして苦慮して頂いたことは覚えていきます。

あの時の私は暴走する明菜の手綱赤瀬を取ることに腐心しておりましたから御主人様の手助けは有難いものでした。

その後には安易に暴力を振るった光白峰に苦言を申した後に、お礼を言い損ねたのは痛恨の極みとしか言い様のありません。

その後もこの世界に召喚されて、場の雰囲気によりお礼の出来ぬまま見失ってしまいました。

次に出会えたのが第二王子によって玩具にされるところでした。あの時もお礼を言えずに消えてしまい焦燥感が残っていたことを覚えていきます。

三度目に助けていただいた時の私は周囲の賛辞に驕っていました。前日の夜に吐き気のする事をされたにもかかわらず、気の許せる者

達と一緒に行動しなかったことが恥ずかしいです。

しかしながら、御主人様に助けていただけたときは涙が出るほど嬉しかったです。そして、結果的にお礼を伝えられた自分が誇らしく思います。

あの後も、光の浮気を知って自暴自棄になった私を受け入れて、めぐるめ目眩く甘い時間を過ごさせていただいたことに感謝いたしております。

私が御主人様に慰めて頂いているのに、明菜は無神経に私と御主人様の仲を引き裂こうといたしました。御主人様と共に教育して上げたことは良い思い出です。

お城が怪物に襲撃を受けたときに、メイドからお姫様と光のことを伝えられ我を失ってしまいました。

冷静に考えると、既に裏切られていて、彼を失っても怖くは無いはずなのに、あの時は光を失うことの喪失感に恐怖を感じていたのです。

今では、小さい頃から好きだった光の間に、目を向けられなかった自分に怒りを感じております。

恋は盲目と申す通り、光について都合の良い事しか見えなかったのです。

両足を失い、初めて光の行いに向き合って過去に決着を付けました。そして、傍らにいて足を治して下さった、御主人様の大いなる優しさに触れ合って感銘を受けたのです。

御主人様以外の男に懸想していたことなど、黒歴史として無かった事にしたいくらいです。

私は生涯、御主人様と共にあり、御主人様無しでは生きる意味を失うことでしょうか。

現在の私は御主人様を中心に回っています。

朝、御主人様を起こさないように起きるとメイド服に着替えます。御主人様から頂いた戦乙女の首輪は便利なもので、服をリセットすれば服が新品に変わり、匂いや汚れが無くなるので重宝しております。

私はクラスとして使用している<侍女^{メイド}>以外でも、隠しクラスの<女王^{クイーン}>の高級クラス<女帝^{エンプレス}>を持っています。

このことを御主人様に相談したところ「チート？いや、バグキヤラか？」と呆れておりました。……ところで、チートって何ですか？他人は羨むクラスなのでしょうが、私としては<女帝^{エンプレス}>の衣装である、顔より大きい金の冠とレースの十二単は動きにくく、スキルプラスとして貰える<宇宙戦艦>は、扱いどころのない無用の長物と化しているのが正直なところです。

着替えていると溜息が出てきます。此処最近の御主人様は私をお使いになりません。

やはり幼女の身体になってしまったのが原因でしょうか？

御主人様によりますと、私の両足を治す際に、身体全体の物質存在量に御主人様の力が触れたため誤作動を起こしているとの事です。
(肉体変質(魔術過敏症))

それゆえ十代以下の場合には働かないはずの十代化が働いてしまいい。十歳の時の私になってしまっているそうです。

十歳の時の私は、同年代の子供達に比べて小さく痩せていましたので、この状況は正しいのでしょうかが何だか理不尽な気がします。幸い首輪を取れば元に戻るのらしいのですが、時が来れば元に戻るとの事ですし、折角御主人様に貰い受けたものですから返還する事は考えられません。

かくなる上はこの姿のまま欲情して貰うのみです。

路利やペドなどこの世界には関係ありませんし、御主人様は神様なので人ではありませんので、問題ありません。

着替え終わりましたら御主人様のために朝ごはんの支度をします。家で朝ご飯を作る時はいつも憂鬱でしたが、御主人様に美味しく食べて貰えると思っただけで楽しく感じるので我ながら現金のものです。

朝ごはんを作り終えたら、御主人様の朝の生理現象の処理をさせて貰いにいきます。

御主人様の股の間に潜り込んで御奉仕することは幸せの一言に尽きます。

御主人様が起きるまで至福の一時を味わい。御主人様が起床なされると服の着せ替えを手伝います。

御主人様が嫌がってもこればかりは御主人様に使える身分としては譲れない一線として強固に押し通していただきます。

最近は御主人様も無駄だと悟ってきたのか何も言わずに流されるままになってきました。良い傾向です。

朝のご公務として御主人様たちに連れてこられた奴隷達の代表と会議を行います。

議題は現状の王都の不満点と再開発計画、新しく作られた道具、最近の流行など多岐にわたります。

会議の出席者達は御主人様以外、奴隷の代表を務めるだけあって、自己主張の激しい方ばかりです。

文句を言うだけで自分で動こうとしない者、御主人様を地位から落とそうとする者、御主人様の貞操を狙っている者達ばかりで油断なりません。

最近、私の地位を脅かすものが現れております。

一万人の御主人様の奴隷が出来ましたが、中には云われの無い折檻によって傷ついた方もいます。

最初の首輪登録時に、多少の怪我（膜の修復）程度であれば首輪の力で治してくれるそうですが、それ以上の怪我だと首輪のほうでそれが正常だと認識してしまうそうなので、御主人様自らが治さなくてはいけないそうです。

リーフルーテと名乗るハイエルフの幼女（ステータスにより確認）は、媚薬系のクスリで頭が逝かれていましたが、御主人様が慈悲深く治療して、なんとか受け答えの出来るぐらいまで回復しました。何処を見ているのか分からない瞳。人形のように喋らず、表情を動かさない顔。透き通るような白い肌に映える、白金に流れるサラサラな髪の毛。私より大きいですが幼い肢体。

その存在全てが私の敵だと訴えています。

彼女が雛鳥のように御主人様の後ろに付いて行くと気が気ではありません。

御主人様も早くあんな女を見切りを付けてステテシマエバイノ二。

でないと私がコロシテシマイソウデス。

早く、御主人様に知られずに処理する方法を考え付かなくては……

「君達は元の世界に帰ることが出来る。」

御主人様のその言葉を聞いた時。ああ、そうなんだとしか思えませんでした。

御主人様が一日のご公務を終えられて団欒の時間を過ごされるときに、私と明菜は御主人様に呼ばれて二人で御主人様の部屋に向か

いました。

その時は久しぶりのご寵愛を明菜と一緒に頂けるのだと期待しておりましたが、元の世界に帰れることの説明だったようです。ちょっとガツカリ。

「わたし達本当に帰れるのか?!」

明菜の弾んだ声が遠く感じられます。

私にとって御主人様と共に生きること誓った日から、元の世界への執着が無くなった性でしょう。

御主人様が残られるなら私も残り、御主人様が帰られるなら私も帰るだけです。

っ！　そうです。御主人様が帰られるなら、一万人のメスネコに対処する心労が無くなるじゃ無いですか!!

これは一刻も早く御主人様を元の世界に帰さなくてはいけません。

「御主人様は帰られるんですか？」

「僕は帰れない」

私の疑問の答えは素っ気無いものでした。でもそれでは納得がいきません。

「帰れない。ですか？」

「向こうに帰った途端に死亡するからね。」

「帰りたくても帰れない」

「では私も帰りません」

御主人様が帰れ無いなら私も帰りません。それは当然のことです。それにしても死んでしまうような大事になっていようとは思っても見ませんでした。

元の世界に帰りたくても帰れない悲しみを一杯癒して差し上げましょう。

「何で死亡するんだ？」

明菜が御主人様が亡くなられる理由を訊ねてました。

御主人様に対して何という口の聞き方でしょう。これは後でOH ANASIが必要ですね。でも、私も理由が知りたいです。

御主人様はジツと此方を見つめると溜息をついてから説明してくれました。

「……………ふう。」

僕は君達と同じく白峰の召喚に巻き込まれてこの世界にやってきた。

その時に下半身は元の世界、上半身は魔神の居た次元の狭間、そして魂だけがこの世界に召喚されたんだ。

上半身は魔神と融合して使え無い状態。だから、魂だけ元の世界に戻っても下半身だけの肉体では死んでしまうんだ」

何てことでしょうか。御主人様がそんな状態に為っていただなんて。もし、変わるなら変わって差し上げたいです。

「君達が帰るとしたら、召喚された直後に帰れるようにしよう」

「私は帰りません。」

私の身も心も御主人様に捧げております。
御主人様抜きで元の世界に帰ることなどありえませんが」

私達を元の世界に帰そうとする御主人様に私は宣誓した。
御主人様抜きの世界などありえませんが」

「朋美が残るなら、わたしも残る」

明菜が私を出汁にして残留を宣言しましたが、御主人様と一緒に居たい魂胆がミエミエです。

やはり後でKYOUIKUして置くべきでしょう。

そして、御主人様に聞かせるのは私一人で良いことをSET TOKUしなければなりません。

「……御主人様。

もう御用はありませんね？

では、明菜は部屋に戻ってください。」

「朋美？なんか怖いよ？」

私の笑顔を見た御主人様は椅子から立ち上がり後ずさり、朋美はカクカク肯いて部屋から出て行きました。

二人とも青い顔して、私の顔がそんなに恐ろしい顔なのか？……酷いです。

「御主人様。今日こそはご寵愛を頂きたいのですが」

「えっ？ ああ、うん、元の姿に戻ってからね？ その姿だと拙いから」

御主人様は私の魅惑の上目使い懇願を必死に逸らそうと懸命です。そんな御主人様が可愛いらしく思えます。

「わかりました。」

私の了承にあからさまにホツとした顔を向けられるとカチンと来るものがあります。

いいでしょう。その喧嘩、買います。

私は自分の身体の内面を見つめ、血流を把握し、元の身体をイメージします。

一時的ですが元の姿に戻れる事を確信しておりました。

その考えが正しいことを今証明して見せましょう！！！！

「なっ？ えっ？ あれっ？ どうやって？」

「愛の力です」

原理は分かりませんが一時的に私の身体は元の状態に戻りました。これで文句は無いでしょう。

それにしても強引な手段でしたので、大きくなったのは一時的のもので、愛し合っている最中に身体が小さく戻ってしまうでしょうね。ですが、其れは其れで、御主人様のがお腹いっぱい感じられるので良い事です。

さあ、たくさんアイシテモライマシヨウ。

12 黄蓮寺朋美（後書き）

すみません。結局、幼児化の魔力に勝てずに朋美さんは小さくなりました。

13 黒淵夜彦(前書き)

黒淵夜彦
s i d e

13 黒淵夜彦

轍という舗装された道の上で幌馬車を走らせる。

馬は指示しなくても決められた道を歩み続けるが、

引つ張られる馬車はガタガタと揺れて、時折、小石によって業者台から弾かれる。

この地方の主要な道でさえこの有様だ。辺境にいけばもっと酷くなるだろう。

そのことを考えてウンザリする。

平穏な現代生活に浸った俺の尻けつには、この世界の道は痛すぎた。

憂鬱な現実を、後ろから押し掛かってくる荷物が被害をさらに拡大させている。

荷物は二つほど前の街で手に入れたお客さんである。

銀髪の小柄な少女で、さる高貴な御家に生まれた血脈正しい御方であるが、何を気にいられたのか後ろから抱き憑いて離そうとしない。

背丈に反した大きめの胸が当たっていて気持ち良いのだが、押し掛かってくる体重と子供特有の高い体温で、いい加減に鬱陶しくなってきた。

さらに馬車の中からの絶対零度を孕んだ複数の視線が、精神をガリガリと削っていく。

すでに何を言っても角が立ったので、現実逃避という我慢で精神を安定させることにした。

俺が白峰光と出会ったのは保育園の頃。

初めて会った時のアイツは、女つ誑しでは無いが女性受けする天使バカ面の笑顔を、いつも周囲に向けていたと記憶している。

俺とアイツが変わったのは小学生の時。歳の離れた俺の姉さんが

殺された後からだ。

当時の事はよく覚えている。

俺とアイツは良くつるんで姉さんに可愛がって貰っていた。

姉さんは綺麗で美しい人で（当時の美化された思い出じゃなくて写真を見ても下手なアイドルよりも綺麗だ）特にアイツは猫可愛がりをされていたな。

今から思うとアイツは初恋で、姉さんはシヨタの気があつたのかも知れない。

ある日、暴漢に襲われた。原因は分からない。多分ぶつかったか何かだと思う。

薬中だったそいつは俺達をボコボコにして、止めようとした姉さんを俺達の前で犯して殺しやがった。

俺達はその様子を見ていることしか出来なかった。

悔しくて吐き気が出るほど頭の中が沸騰していたが、男が首を締めて姉さんを殺した後、フラフラしながら自分の足で崖に向かい、墜落する様子を目に焼き付けていることしか出来なかった。

その晩から毎回夢に出る姉さんの陵辱場面が怖くて、悔しくて、気がつけば近くの赤瀬剣術道場の門を叩いていた。

俺が武道の道に逃げ込んでいるときに、アイツは女を食って取っ替え引っ替えしていたらしい。その頃のハーレム要員の一人からの情報だ。

俺はアイツが変わってしまったことに気がつかず、武道に打ち込んでヤンキー狩りをしていた。

チンピラ狩りをしていた俺に、肉体的なOHANASIで裏のイロハを教えてくれたのがオバ、ゲフン、綺麗な美人所長で、裏社会の色々な経験をさせて貰った。

冷凍マグロの中に詰まった麻薬を追いかけて、所長が車で弾いたマグロにひき殺されそうになったり、刃物マニアのキチガイに新しい刃物の実験台にされたり、紛争地帯の上空で優雅にパラグライダーしてみたりと、色々だ。

そんな絶望的な素晴らしい冒険の中、生まれ故郷で未青年が売春組織を作っていることを知った。

今までの経験の中でも遥かにましな教育指導の仕事を請け負い、組織の頭の上にアイツがいることを知り、そこで初めてアイツの犯した惨状を知った。

俺の説得によって、アイツは女に自分を売らせることは止めさせることを確約したが、喰うことは止めさせることが出来なかった。

アイツを好きになる女性が、自分から股を開くのに強制出来ないからだ。

せめてアイツの犠牲者を少なくするために、少しは控えるように伝えたが、聞き入れてくれなかった。アイツの頭の中によると自分に犯されることで女性が守られるらしい。

会わない間に頭がおかしくなったことに悲しくなった。いつか天罰が下らないと良いが……

それからもチョコチョコ会っては近況を報告したりの関係が続いた。

その日もアイツが男共に囲まれている女を救おうとしているのが見えて、一応加勢することにした。……道場の後取り娘が居たので見て見ぬ振りすると後で怒られそうだからと言うのも関係はある。

道場に何故来ないのとか、所長胡散臭い女（言いえて妙）に付きまとうのは止めるだとか、助けたはずなのに怒られていると、周囲を怪しげな気配が漂っていた。

一瞬にして周囲を取り囲む光る紋様の球状鳥籠。

本来なら最大警戒で脱出するはずだが、紋様の壁当たりに男が顔を出しているのを見て気が抜けてしまった。彼が光る紋様の中で抵抗なく動いていたからだ。

結局、脱出の気を逸らされた俺は、球状紋様陣の中心であるアイツに巻き込まれて、赤瀬達と共に召喚されてしまった。

召喚された後は何の冗談かと思う。

ギアナ高地張りに断崖絶壁な場所に造られた召喚神殿。

西洋のお城を思い浮かべさせる建物。

アフリカで良く見かけた石造りの住民区。

勝手に召喚したくせに、横柄な態度で此方を疑って掛かってくる兵隊。

光だけじゃなく俺達にも首輪を着けさせようとした時点で怪しさ大爆発だった。

唯一の救いは首輪を付けられる前に、覚醒の儀とやらで闇の精霊を発現できたことだろう。

覚醒の儀の後で力の試しをさせられた時、俺は闇の精霊を呼び出すと闇を扱った。

周囲が驚愕の反応を返したのですぐに取りやめたが、やはり闇は不味かったことが判明。

周囲の恐怖に顔を歪ませた様子を伺いながら城から脱出する手段を探した。

闇の精霊シエライドが言語付与が使えるということなのでお願いして、首輪の無効化も含めてお願いする。

こんなことは精霊の中でも光と闇の上位精霊である大精霊シエライド様しか出来ないとか自慢されたので、適当にスルーした。

敵意だらけの城に留まることが危険と判断して城を脱出を敢行。
予想通りに俺を殺しに来た奴等を返り討ちにして、彼等の懐から旅のお駄賃を頂いてトンずらした。

闇の精霊を駆使して夜中を必死で逃避した結果。三つ先の街で力尽きたので、宿屋に泊まって移動を繰り返し、三日目にして国境を越えることに成功する。

国境近くの比較的大きな街で旅の疲れを癒して今後のことを考える。

取り合えず、金と情報収集をして国外に逃亡しなくてはいけない。情報収集の基本として酒場のマスターに訪ねたところ。近くに山賊が出没するので腕があるなら傭兵組合に参加して討伐してくれないかと頼まれてしまった。

何でも国の兵隊は隣の国の脅威に備えるべく主要な砦から離れられないらしく、傭兵の主だった者も国に強制的に雇われて山賊達を討伐する人間がいらないらしい。

それでも街道の安全のために街から資金を出して、初級が殆どだが数をそろえて討伐を行うらしい。

でまあ、傭兵組合に参加して山賊を潰したわけだ。

相手も情報の大切さが分かっていたらしく、スパイがいた為に迎え撃つ準備をして手薬煉引いて待っていた。

当然それを知らない俺達は罠に引っかかり、気を張っていた俺と数名以外は捕まってしまった。

唯一の救いは初級傭兵をまとめて奴隷にする予定だったのか大抵の人間は活かされたままだった。

生き残った俺達は、闇にまぎれて山賊のアジトを強襲し、（俺が先行して罠を全部無効化して脱出路も潰してやった）見事人質を解放。山賊たちを殲滅した。

いや、軽く説明したけど、実際は敵も実践経験豊富の手練ばかりで、初めは混乱していたけど時間が経つに連れ態勢を整えて、奥の^{關の}精霊^{精霊}を使用しなければ全滅するぐらい危ないところだった。

山賊は隣の国、つまり俺が出奔したオルスターン神聖王国と繋がっていたらしく、旅人を襲ってはオルスターン神聖王国の国営奴隷商人に卸していたらしい。

山賊のアジトを家捜しすると隠し金庫の中から国営奴隷商人との証文が出てきた。

囚われていた人達の中には隣国のお姫様がいた。

お姫様がこんな所で捕まっていた理由がオルスターン神聖王国に留学して帰国中に襲われたらしい。山賊の話ではこの国とお姫様の国を戦争させるために襲撃を依頼されたとのことだ。

オルスターン神聖王国の国営奴隷商人と繋がっているのだから彼の国が関わっているのだろう。

今更ながらあの国が何で自分達を召喚したの疑問になってきた。

取り合えず生きて帰った俺達は戦闘の疲れを癒した後、馬車と路銀を報酬に捕まっていた人達を送る旅に出たわけだ。

現在荷台に居るのは、これは運命ですわゝてな感じで俺から離れようとしないうお姫様のユクーシャとその護衛役サラフィンヌ、そして山賊退治に知り合ってパーティを組むことにした剣士マルガリーテと魔術師アステシアで、全員女性だ。

おかげで道中は女性の中に男一人という肩身の狭い思いをしている。

所長に教育されたせいで女性に強く出れなくなった自分が恨めしい。

始まりは陽炎が出たのかと思った。
直ぐにそれは違うと気づかされる。

馬の背の上以外には揺らめきが無いのだ。

周囲はまともな風景なのに其処だけが異常。

俺はすぐにお姫様を引き剥がして後ろに転がすとナイフを抜いた。
後ろから文句が降って来るが関係無い。今の状況に対処するのが
先だ。

俺一人なら既に逃げている。だが、今は足手まといがいる。

揺らめきは人の形を取ろうとしていた。

闇の精霊を出すか？

今は昼間だから彼女の機嫌は悪いだろう。しかし、今は異常事態
だ。

馬が脅えた様子が無いのが気になるが、出せるように準備しとく。
この世界で生き残るには警戒しすぎるほどが丁度いいのだ。

「主殿、気を付けられよ。相手は妾よりも強い。」

喚び掛けても無いのに闇の精霊シェライドが真っ黒なゴスロリ姿
で影から現れた。

この娘は髪から肌の色まで真っ黒なので人では無い事を疑う余地
も無い。

自尊心の強い彼女が認めるなんて余程の者なんだろう。

揺らめきが完全に人の姿となって色を成すと男の姿となる。

「やっと繋がった……」

……こんにちは。

憩いの一時お邪魔するよ？」

男が俺の後ろを確認してから引きつった顔で語りかけてきた。大方俺の後ろの女達が怖い顔をしているのだろう。安易に想像できると俺も後ろを振り向きたく無い。

しかし、何処かで見えた顔だ。

男の姿が時たま揺らめいていたり、向こう側が透けている状態なので幻影なのだろう。

馬の背に突っ立っている姿はシユールだが、幻影だったり語りかけてきたりするということは、戦う意思は無いのだろう。もっとも世の中には笑顔で殺せる人間もいるので油断は出来ないが。

「別に構わない。久しぶりに男と喋れて嬉しいくらいだ」

相手の手の内が解らないうちは此方から会話を進めるのは得策では無い。が、相手が罫を張って時間稼ぎしていないか気を張らないのはバカのことだ。

「済まないが此方は余りのんびり出来ない。

元の世界に戻る方法を言っておく」

爆弾落としやがった。

俺が一番知りたい情報であり、周りにいる女性達には知られたい無い情報だ。

背後の圧力が上がっていくのを感じる。

これは説明するだけでは納得してくれそうに無いな。

「僕達を召喚するために使われた天空召喚陣は失われた。

まあ元々僕達を送り返すための力が残ってなくて、力を回復させ

るには地脈を弄らなきゃならない。その結果、大地震を引き起こして天空召喚陣と地下神殿が崩れてしまふという、どうにもなら無い状況だったんだけどね。

そこで代替え案。

一つは魔王殿の地下にある禁忌の扉を開いて、その奥にあるトキジクの実を取り込む方法。

一つはハイエルフの守る世界樹に魔法陣を刻み、洞の中と元の世界をつなげる方法。

一つは深海に沈む古代都市を起動させ、時空の狭間を渡る方法。

あとは僕を見つけること。

幸か不幸か僕は送還する手段を持っている。僕と出会えれば元の世界に帰してあげよう。」

上から目線の言葉に反発心を覚えるが、闇の精霊シェライトよりも力が上だと言うことを思い出して押さえつける。実際、こいつから放たれている言葉は俺が欲しい情報で、この機会を逃せば二度と貰えないかも知れない重要なモノだ。

「ああ、それと物質存在量について話しておくよ。

物質存在量とは元の世界の物質存在の量。簡単に言うと身体の質量。

この世界で身体の一部が欠損すると物質存在量が減って、この世界で欠損した身体を治療しても物質存在量は元に戻らない。

つまり、この世界で手足を無くして治療で手足を生やしても、元の世界では物質存在量が欠損した状態だから、身体の質量密度に隙間が出来てしまう。

酷い状態だと身体の構成する原子が隙間だらけで、身体の維持が

出来なくなり衰弱して死んでしまつんだ。

普通に治療して手足を生やした場合、元の世界に帰れなくなってしまうから気を付けて」

驚きの情報だ。帰還の方法と同じくらいに重要だといえる。

こいつの言っていることが本当ならば、簡単に怪我をしてはいけない。

向こうの世界では当たり前だが、怪我^{イコル}死と考えて行動したほうがよさそうだ。

だが、この情報を俺に与える意味は何だ？こいつは何を得する？取り合えず情報を途切れさせてはいけない。何をするにしても情報だ。

「お前に会うには如何すればいい？」

これは聞いておかなきゃいけない重要なことだ。会えれば情報が引き出せる。

「僕とは会えるときに会えるとしたか言えない。

白峰以外の召喚された者は全員無事で、この世界を謳歌していると伝えておく。

そうだな、これは同郷者としてプレゼントだ」

男の幻影からゴルフボール大の白く光る塊が、等速で俺の前まで来て手のひらに乗せられる。

淡く光る以外は白い真珠のような丸い物体だ。

「物質存在計測装置

物質存在が無くなるにつれ色が段々赤くなる。

帰りたいたきはその石に願えば連絡が取れる。

それと、帰るときは召喚された時の時間と場所に戻して上げられるけど、二度とこの世界に戻れ無いから悔いのないようにすること

じゃ、またね」

言いたいことを言ったら、一方的に消えてしまった。

まるで嵐のようだ。

ああいう手合いは言葉の駆け引きとか通用しないので困る。

傍らにいる闇の精霊シエライトに目を向けても首を振るだけで追跡が出来ないらしい。

まあ良い。帰れる手段が見つかったんだ。祝杯を上げて喜ぶ価値の情報が手に入った。今ならば後ろの同行者達に説明するのも苦じや無い。

ああ、あの男。召喚されたときに紋様の壁に埋まっていた奴だ。

後ろに向き直る前に、ふと、思い出した。

14 赤瀬明菜(前書き)

赤瀬明菜 side

以前の王都の町並みとは違う白く大きな建物を眺めて、わたしは溜息を吐いた。

異空間にあるらしいこの場所は東京の街並みもびっくりに勢いで変わっていく。

区画整理がされて、住む場所が一括化された。

空いた場所に闘技場や図書館が出来て、近未来的なシステムチックな街づくりになっている。

そんな近代的な街の中で一番異様に思えるのは樂園と名づけられた場所である。

王都の半分を占めるその場所は大衆浴場とビオトープを合わせた公園で、裸で散策出来る作りになっていて、広い温泉でまったりしたり、冷たい泉で魚と戯れたり、木陰の中を歩いてみたりすることが出来る。

当然、最初は皆、湯浴衣を着て公園内に入っていたけど、今では女性しかいないことを良い事に全裸で散歩が常識になっている。開放的になっての森林浴は気持ち良いんだそうだ。

施設を維持するエネルギー源に元の世界と異空間との落差をエネルギーに変える機関を使用しているらしい。

使用方法を誤ればこの異空間どころか元の世界を吹っ飛ばす威力があるものを、主にゴミや汚物の焼却処理したり、温水や水質浄化施設内の電力などに行っているそうだが、戦乙女の首輪の魔法少女リリカルマジカル>とく銃士ガンズリンガー>の混合上級クラス<魔砲使いホワイトデーモン>のエネルギー源にもなっているとのことだ。

他にもエネルギーを使用している上級クラスがあり、朋美の持っている<女帝エンプレス>の宇宙戦艦にはエネルギー機関そのものが搭載され

ているというから呆れた話だ。

そんな先進的な技術を持つ保養施設で生活していても、最近の激動の生活を振り返ると疲れてくる。

前の世界では生活の苦勞を知らずに、剣を振って、学校行って、友達と楽しく喋る日々。

そんな平和で平穩な日々を打ち壊す事件が起こった。

その日は本家の王蓮寺朋美と買いだしに出ていた。

毎年夏休みに本家と分家の合同で山籠りをしているので、その備品の補充だ。

同じ年の朋美とは良く喋る仲で友達として付き合い合せて貰っている。本来ならば敬わなければならぬのだけれども、公式の行事以外では堅苦しいことはしない約束になっていた。

彼女は女のわたしから見ても綺麗で立ち振舞いにオーラがあつて、付き合いの長い今でも、正面に立つと思わず頭を下げてこの人に一生付いて行こうと思ってしまうぐらい高貴だ。

だから、チャラチャラした彼等が私達に声を掛けてきたのも分かっている。

欲望に忠実な彼等の目的は私ではなく彼女のほうであることも。背が高く胸に無駄な脂肪がある私なんか邪魔にしか思っていないことも。

知性では理解しているつもりだ。だが感情は別である。気がついたときは喧嘩を売っていた。

誰かが仲裁に入ってきたが邪魔でしかなかった。

私の戦意を殺ぐ様に新しく入った男が私達を囲んでいた男達を薙ぎ倒す。

タイミング良く喧嘩に入ってきたのはうちの学校の白峰という王

子様で、彼を慕う女性は非常に多い。見た目だけかと思ったが、助太刀に来るとは中々見所のあるヤツだ。

遅れて乱闘に入ってきたのは我が道場の問題児。黒淵夜彦だ。

最近、妙な厚化粧の女と親しくしているようで、道場に来ないことを含めて三日間耐久OHANASHIを企画していた。

邪魔な男達が居なくなつて夜彦に詰め寄っていると召喚されたらしい。

気がついたら半球状に囲まれた見たことも無い場所に居たからだ。

翻訳出来る首輪には困つたが、召喚された異世界で友人が出来た。相手は公爵家令嬢らしいけど権力を笠に着ない良い娘だ。そのお付にいる双子との交友も感じが良い。この世界に来て初めて心が軽くなつた気分だ。

弥彦の奴が城から抜け出した。

城の雰囲気が悪いのは知っていたから如何しようも無いことも分かるが、わたしも連れて行って欲しかった。

公爵令嬢でわたしの庇護者であつたシャルビニアが実家に帰らなければならなくなつたらしい。

この世界で出来た初めての友人が居なくなるのは寂しいが、どうしても外せない用事らしいから仕方が無い。

信頼していた朋美に裏切られて初めてを奪われた。

しかも相手は幽霊野郎でこの異空間の主。自分の本名も喋らないいけ好かない奴だ。

城の地下から這い出て来る化け物共とも戦つたあげく、奴隷商に売り飛ばされた。

わたしを庇護してくれていたシャルがいなくて、わたしを裏切った朋美がいなくて、わたしを汚した幽霊がいなくて、わたしは頼る人がいなくて、
最悪の気分だ。

気がつくのと街の中央広場に居た。

周り女性達はわたしと同じように首輪をしているから奴隷なのだろう。

城門の上にいる見覚えのある男を見て、わたしはアイツから逃れられないんだと何となく悟った。

初めての一人暮らしに四苦八苦して周りの人達に助けられたり、
教練部隊長を押し付けられて集団戦に頭を悩ませて見たり、
朋美がルイナーク用に作った日本食を食べてホームシックに罹ったり、

そんな目紛るしく変わる日常の中でも、変わって欲しかったものもある。

「アキナ様、お待たせしてすみません。今日一日よろしく願います」

ペコリと可愛らしく頭を下げたのは抱き締めなくなる様な線の細い少女で、小さい背丈、愛らしい笑顔、小鳥が囀る様な声、その全てがわたしの欲した完璧な少女だ。

「いや、今来たところだから構わない」

申し訳なさそうな瞳に押されて、デートで待っている男の台詞を言ってしまうって自己嫌悪に陥る。

わたしは元の世界でも女の子にモテた。それはもう嫌になるくらいに。

背が高くて凛々しいお姉さまなわたしに抱かれないとまで言うてる娘もいた。そしてファンクラブまで存在していたのだ！

この世界で初めての友人であるシャルもその気が無かつたとは言わない。だが、彼女は周囲を押さえたいし、彼女一人ならあしいう事も出来た。

しかし、この異空間で教練部隊長になってからというものの、元の世界と同じようにファンクラブが出来、休日に抽選で選ばれた女の子とデートしなければ暴動が起きる事態になるとは予想もつかなかった。おかげでわたしのプライベートな休日は無い。

考えてみれば一万人以上の女の子がいるのだ。男役がいないと精神の均衡が保たれないのであろう。

それで納得できるわけでは無いが、この状況を造つた御主人様を罵ってわたしの精神を保つぐらいは許されるべきだ。

心配そうに此方を見上げてくる少女に愛想笑いを浮かべて何でも無いように繕う。

それにしても何で心配そうな顔を浮かべるだけで女の子オーラを発散させることが出来るのだろうか？ わたしにも出来ないか今度試そう。

「今日は何処行こうか？」

「あの、よろしければ服屋さんに行きたいです」

服屋とはく戦乙女の首輪の衣服データ交換を利用したデータ屋さんである。

彼女達は衣服データの収集はもちろん、自作の改造したデータを持っていて、その種類は幅広い。この異空間にすんでいて一番良か

ったと思えることの一つは、衣服に金を掛けずにいられることだろう。

わたしは少女の提案に同意した。ハッキリ言ってビオトープで全裸で散歩したいといわれるよりもましである。

「あの、私はルシリア・アイコスといいます。

アキナ様は<女戦士>に成られたんですね？」

「ああ、この格好か…<女戦士>の格好って好きじゃ無いんだよ。ルシリアだね覚えておくよ」

<女戦士>の格好はビキニアーマーなのだ。

防御力は下位クラスのミニスカートにオーバーニーソックス姿の<剣士>や、ハイレグ水着に手足サポーターでレスラー姿の<格闘家>よりも高いことが分かっているのだが、どうしても普段はさほど恥ずかしく無い<剣士>を選んでしまう。同様の理由からメイド姿で過ごす人の数は多い。

「<女戦士>のお姿は良くお似合いになられていたのに残念です」

「その台詞。あなたが<の>になった時に言って上げる」

わたしがそう返すとルシリアは引きつった笑いをした。

<侍女>と<格闘家>の混合上級クラスである<の>は、ミニの脇無し和服姿で下着無しなのだ。大きく開いた胸元と腰横の深いスリットのせいで扇情的だ。

「そっそういえばっ、アキナ様は教導部隊長でしたよね。

どうやってあれほどの強さを身に着けられたのですか？」

逃げたな。まあいい、こんなに可愛い生物なら遣り込める隙は幾らでもあるだろう。

「わたしは幼い頃から剣の修行していたからな。

それに教導部隊長になったのだから、ルイナークの奴と知り合いだったからに過ぎない。

実際、私以上に強い人間は幾らでもいる」

本家の朋美は私以上の実力者だ。剣術だけなら負けて無いはずだが、総合になると足元にも及ばない。

他にも実力者で上に立たれるのが嫌なのか喧嘩を売ってくるのがいるが、大量の書類整理付きで熨斗を付けて渡そうとすると皆逃げていく。……この世界の人間は元の世界よりも書類アレルギーが酷いらしい。

「アキナ様はルイナーク様と仲がよろしいのですか？

ルイナーク様のお付となるには如何したら良いのでしょうか？

いえっルイナーク様に私ごときがお仕え出来るとは思っていないんですけど少しでも側にいらればと思ひまして」

キラキラした期待した目で此方の返答を待っている。

アイツに様付けするな気持ち悪い。

ルシリアは知らないだろうけど人の胸を揉み続けるオツパイ星人だぞ？ 昨日の夜だつて意識が無くなるまで揉みまくられたんだから。

そういえばこの娘は一生物の火傷の痕を治して貰ったんだっけ。もしかして御主人様を尊敬ホレしている？

「悪いことは言わないから止めといた方がいいよ?」

「そうですね。私なんかルイナーク様の寵愛を受けられるわけ無いですよね」

ウルウルと涙目を浮かべる少女の姿に罪悪感を感じる。

思わず手を差し伸べて助けてあげたくなくなってしまふ愛らしさだ。

でも、彼女を御主人様の魔の手から守るには引き止めなくてはいけない。

軽い二律背反に陥ってしまった。

御主人様の周りを寄せ付けない朋美の気持ちがかかる気がする。彼女は御主人様に近寄るもの全てに牙を向けてるけど。

「アイツはサイテーなやつだよ?」

一応、おとし貶めて突き放してみる。

「何でそんな事をいうんですか! あんなに素晴らしいお方を!」

駄目だったらしい。それにしてもプクツと脹れた頬をも可愛らし
い。

それにしても、惚れているというよりも盲信の方が近いかもしれ
ない。

困ったわたしは朋美に丸投げした。

「側にいたかったらわたしからよりも、朋美にお願いしたほうが
いいよ。今度紹介してあげるから。」

ああほら、着いたから気分を変えよう?」

丁度、目的地の服屋さんの前に来たので宿めてあげる。

<錬金術師^{アルケミスト}>のお店らしく、扉の装飾も凝った作りで目を楽しませてくれた。

ルシリアは紹介の言葉に顔を喜ばせて意気揚々と店内に入っていく。

しまった。余計な約束しなければ良かった。

朋美の般若の面が脳裏に浮かんで寒気が走る。

しかし、喜んでいるのを取り下げの訳にもいかず、泣く泣く死刑台に登ることを決意した。

陰鬱な思いで店の中に入ると、店内は錬金術で作られた色々な小物が飾られて見ていて厭き無い。

どうやら服を売るだけじゃなくて、趣味で作った小物も売りにしているらしい。

店の主人は獣人系らしく猫のような耳を頭に付けていた。

彼女達獣人系はこの異空間全体の四割をしめ、人間の三割を上回る数だ。数は珍しく無いが、人間しか居ない世界から来たわたしからしたら慣れていないので、目の前に立たれるとギョツとしてしま

う。

ちなみにエルフなどの亜人系は二割、その他が一割になっている。

わたしは上機嫌のルシリアと共に、悲惨な未来を忘れるため買い物に現実逃避した。

15 日常

僕は今、シヨルイシゴク事務処理に襲われている。

一万人の女奴隷の移住と<戦乙女的首輪>の作成、食料複製、各集団の代表選出、区画整理、施設建設、住民帳の作成、という一大イベントから一段落ついて、住民の不満を解消すべく目安箱から意見・要望・改善案を処理中であった。

ええつつと。アイテム99<時間凍結型複製庫>に果物と香辛料の種類を増やして下さい。

<時間凍結型複製庫>は物品一つ入れておくだけで現状のまま保存して、好きなだけ複製が作れるという物価泣かせの倉庫である。

果物は異空間要塞の停泊時に街で買えばいいかな？ 要検討。

次の街での停泊時に果物を買う予定、つつと。

現在の異空間にある王都は名前を付けてトキッ？！<異空間要塞ザイン>とし、世界各地を放浪して行商人の真似事をする女だらけのお屋敷大団ことにした。

金はあればあるだけいいし、アイテム99<時間凍結型複製庫>があれば新鮮な食料が尽きる事も無い。こんなに好条件で商人をしないわけにはいかないであろう。

次、魔法具の小物も<戦乙女的首輪>に衣装登録出来るようにして下さい。

面倒くさいから却下。取り敢えずの理由は<戦乙女的首輪>と魔法具の小物が干渉し合うため。

菓子工房を作る許可を下さい。

許可。朋美と明菜に元の世界のお菓子を伝授して貰うか？

知らない可能性もあるから元の世界のお菓子の本、ついでに料理の本も召喚したほうがよさそうだな。……朋美がお菓子作りに時間を取られて僕に構わなくなってくれると嬉しいのだが……

周りの女性に目を向けないで下さい。

この文字は朋美だな？ 却下。仕事が出来ないじゃないか。

ルイナーク様専用の近衛部隊を作って私を入れてください。

？ 名前が無いけど検討はしておくか。

胸を揉まないで下さい。

今度は明菜か……却下。あの柔らかい肉包みには夢と希望が詰まっているんだ！

本音を言うと女性が多い中での気疲れをオッパイ揉むことで癒されているから、オッパイの無い生活なんてあり得ない。

職業クラスに固有のスキルを追加してください。

うわっ随分とあるな。とりあえず検討して暇な時に少しずつ増やす方向で。

胸を大きくしてください。

……切実だなあ。後で僕の部屋に来るように。一昼夜の間、揉まれ続ける覚悟があるなら。

全裸で仕事しても良いですか？

個人的には許可だけど、却下。公私はきちつと分けましょう。

ルイナーク教を認めてください。

却下。

なにになに？ 理由として精神の弱いものの支えになること。集団
統一の柱になること。ルイナーク様に忠誠を洗脳出来ること。

ううむ。魅力的な提案だけど忠誠を洗脳できると言われても職業
クラスを上げていけば自然とそうなっちゃんだよな〜。

大きすぎる力を持つ代わりに僕に忠誠を誓って人間性が失われる
罠。

肉体損傷の最終形、天使化すると大勢の前で全裸になっても何も
感じないし。

集団統一といっても一番上が僕なのだから、統一出来なければ僕
にカリスマが無いという事にしか過ぎない。

唯一のメリットは精神の支えか……

一体誰がこんなこと書いたんだ？ ……フレイア・リーグ？

ああ、いつも朋美に睨まれていた青髪の少女か。

いつも僕を熱心に見つめていたけど、あれは陶酔した目で見てい
たんだろう。そうじゃないかと思っではいたんだ。認めたくなかつ
ただけで……

宗教化に関しては基本は却下だけど、宗教にしないなら許可にす
るか。纏め上げる点では有効だし。

……一度話し合う必要があるな。

故郷に帰りたいです。

遂にきたか。身辺が落ち着いてきたら何時かは来るかと思っ
てはいたんだ。

大方、心に余裕が出来て、故郷のことを考えられるようになった
のだろう。

帰すのは吝かではない。

<戦乙女の首輪>を返して貰うのは当然として、アフターケアと
して少しの金貨と、故郷になじめず、またこの国の住民になりたい
人のために<帰還の指輪>を渡すべきであろう。

< 帰還の指輪 > で思いついたのだが、住人全員で行商人をして世界中と商売するのはどうだろうか？

現状では働かなくても衣食住が揃っているので、働かない人が大勢いる。お昼様

この引き籠もり達を解消するために世界中に行商人として派遣して、稼いだお金を競わせて上位にはご褒美を上げる。行き帰りは< 帰還の指輪 > にして、ニート 検討する必要があるな。

取り敢えず、今度の街に停泊する時に注意事項を伝達して故郷に戻れるようにするか。それと街の中に遊びに行く人達を抽選で決めなくちゃいけないだろう。流石に万人を一度に降ろすのは不味すぎる。

大量にある改善提案書という現状の不満を粗方処理して溜息を吐くと練兵場の方向を見た。

其処では思い思いの格好をした少女達が必死に戦闘訓練を行っているのが見て取れる。

< 異空間要塞ザイン > に住む女性達は強制的に戦闘訓練を受けさせられていた。

毎日四時間の訓練を義務付け、週に一回は一日訓練を受けなくてはならない。

正規の兵隊でも無いのに訓練量が多いが、彼女達全員に身を守る術を教えることと< 異空間要塞ザイン > が敵襲を受けた場合にパニックにならず、落ち着いて行動できることを身体で覚えさせるためだ。

やる気を出させるために、適度な運動は健康に良く、身体の活性化によって肌がピチピチになり、そして、お腹周りを引き締める効果があるというと、喜んで引き受けてくれる人が続出してくれた。

更に駄目押しとばかりに、ご褒美として、練習量が多く、技量が伸びた上位十名に、新作お菓子の優先券、金貨十枚（銀貨千枚相当）

、次回審査までのルイナーク様の護衛をするという栄誉が授けられる。

また、戦闘訓練ばかりだと脳筋になる可能性があるなので魔術と知識、それぞれにおいて同じようなご褒美を用意した。

戦闘訓練や魔術、知識において競い合う形にしなかったかという
と、上位になる人間が固定化されるのを防ぐためである。(とくに
朋美)

毎回同じ人がご褒美を貰っているとやる気に関わるのでこのような形となった。

とはいえ、国の中枢を司る人間がそれなりの実力者で無いと困るため、近いうちに実力者決定戦をする必要があるが。

息抜きも計画しなければならぬ。

閉鎖された空間で女性だけが集まっているのだ。欲求不満にもなるだろう。

一万人を降ろすことは出来ないが抽選で降ろす人を決めれば問題ないと思う。

出来れば降ろした先の町長に話を付けて起きたいところだ。

ここから近いところは……公国か。

この公国は奴隷の身分をしつかり管理している。王とは奴隷の身分の考え方で険悪になっていたそうだ。もし、奴隷になったら公国に行ける事を祈れとは、それほどまでに扱いが違つことを暗喩した言葉だ。

「何してるんですか？」

いつの間にか部屋に入ってきた明菜に尋ねられた。脇に抱えられた書類を見るに、どうやら彼女は教導部隊の報告書を持ってきたらしい。

最近の彼女は色っぽくなった。毎夜の如く情事を重ねているからだろう、女としての艶が出てきたのだ。何気ない仕草が情欲を掻き立てる。

「書類の多さに黄昏ていた」

僕の返答に苦笑で答えられた。

目の前の書類の山を見て藪をつつきかねないと判断したのだろう。何も言わずに書類を山の上に置くと部屋から出て行ってしまった。

明菜が部屋を出てから手伝われば良かったことに気づく。道連れを増やすチャンスを棒にしたことに泣きそうになりながらも、再び書類の山と睨めっこを始めた。

やる気を出して書類の山を崩そうとすると、扉にノックがされて出鼻を挫かれた。

入ってきたのは朋美である。

最早定番になったメイド服に身を包み、後ろに複数の同じ格好の少女達を引き連れている。

「御主人様の近衛隊を結成しましたので顔を見せに参りました」

「近衛隊？ 何時の間に？」

「自己紹介を」

どうやら近衛隊は決定事項らしい。僕の非難を無視して勝手に自己紹介を始めだした。

先程要望書に書かれていた近衛部隊の件はこのことだったのかと妙に納得する。大方朋美が裏で暗躍していたに違い無い。

「フレイア・リーグです。この度はルイナーク様にお仕えすることが出来て光栄に存じます」

青髪の少女が最初に名乗りを上げた。

この娘は僕の教団を作ろうと要望書を出していたはず。

それに朋美が敵意を持っていたはずなのに、一緒にいることの違和感を覚える。

いつの間に仲良くなったのだろうか？ いや、この場合は手を組んだと見るべきか？

「ティアルス・エルシーダです。ルイナーク様のお側にいられる名誉を、この上なく光栄に思います」

こちらは緑の髪の少女だ。フレイアと喧嘩しているところを見たことがある。

何かの同好会の会長だったかな？

フレイアとの見えない火花が散っていて怖い。

「あいつ、ルシリア・アイコスです！ よつよろしくお願いしましゅっ」

ブラウンの髪の可愛らしい女の子が顔を真っ赤にして頭を下げてきた。

噛んで恥ずかしがる仕草も愛らしい。思わず抱き締めたいほどだ。

「リーフルーテ」

白金髪のハイエルフの幼女は一言で終わった。

クスリの影響から治って無いから人形のように無表情で、期待はしてなかったけど、もう少し言葉が欲しかったかな？

「以上、私を含めて五名が近衛隊として御主人様の身の回りの世話をします。」

尚、後で親衛隊から五名ほど追加する予定です」

「親衛隊？ そんなものまであるのか？」

「はい。ルイナーク教を目論んでいた<聖なるルイナーク様の会>と玉の輿を狙っていた<ルイナーク様陥落同盟>、その他を纏めて御主人様を奉仕することに特化した、2356名からなる部隊です」

僕の驚きの声に朋美は簡潔に説明してくれた。

それにしても両方水と油の関係なのに良くまとめられたと思う。

片や精神依存系、片や物欲万歳系なのに、目的意識だけで協力関係にさせるとは、奇跡でも起こさないう限り無理なんじゃないか？

不可能を可能にした朋美に恐怖を覚える。

このまま僕は飼い殺しにされるんじゃないかと遠く無い未来が心配になった。

前向きに考えよう。取り敢えず、これでルイナーク教の問題が解決したわけだ。

この際だからこの国全体の意識改革センソウとかは朋美に任せよう。仕事センゴウが溜まっているのに面倒くさいことに関わっている時間が惜しい。最悪、この国が乗っ取られるかもしれないけれども、その時は全てを投げ打って逃げよう。

僕が後ろ向きに決意を固めると、まるで全て分かっていますよと言わんばかりに笑みを浮かべている朋美と目があつた。

駄目だ、逃げ切れない。

僕は本能的に悟って、これからの生涯、負け犬人生を謳歌することを許容した。

「御主人様の身边のお世話は基本的に私が致しますが、補佐として彼女達も致しますのでご了承ください」

「ハイ、イイデスヨ」

朋美の満面の笑みに魂の抜けた返事で返すことしか出来なかった。

16 公爵領(前書き)

パソコン壊れたのでタブレットで入力

16 公爵領

王国第二の都市であり、クルスラスク公爵家の屋敷があるこの街は普段よりも人が溢れていた。しかし、活気に溢れているわけでも無かった。

生気の無い人達が街を行き交い、路上に座り込み、それを古くからの住民が忌まわしげに対応する。

悪循環で絶望的な雰囲気、街全体を曇り空のようにどんよりと包み込んでいた。

原因はこの間の王都壊滅によって生じた避難民の量が街の許容量を上回っているせいである。

この街は国内有数の大都市であり、公爵家によって善政を引かれている国内で唯一まともな都市であるために、少しでも平穏と物資を求めて避難民が集中したのだ。

大多数の人々は壊滅した王都を棄てて、安定した暮らしを求めてこの街まで流れてきている。

しかしながら、この街にそこまでの許容量は無く、あぶれた人達は町の外にスラムを作り、犯罪の温床となって治安を悪化させていく一方であった。

この街が犯罪都市になっていないのも公爵と優秀な配下達の手腕によるもので、一歩間違えれば破滅の道を転がるような綱渡りの行政で街を維持しているのだ。

僕はそんな泥沼の中のような息苦しい街中を、朋美と明菜を連れて歩いていた。

「本当に会ってくれと思うか？」

「彼女が裏切った訳では無いのだったら可能性はある。」

明菜の不安に応えてあげた。

僕は現在、公爵の屋敷に向かって歩いている。

明菜の世話になった公爵令嬢と渡りを付け、できれば公爵本人と交渉がしたいと思っていた。

目的は難民への人的支援である。

僕のせいでは無いにしても、王都壊滅のきっかけの一因であることは確かであった。それゆえに現状の街の様子に良心がいたむものだ。勿論、タダで支援をすると疑いがかかるので何らかの見返りを要求するつもりだ。

タダより高いものは無いのである。

まあ、本当のところは明菜を出汁にした職務放棄だ。サボリ

主目的のルイナーク商会の方は、商売上手な娘達だったのでその子に全てを任せてある。

試しとはいえ、金銭感覚のしつかりした娘達なので、海千山千の商人達と仲良くしてくれるだろう。

例え赤字を出しても一から無限を生み出せる立場としては気楽なものである。

明菜の方は暇潰しゲンジツトウレに興が乗ったから首を突っ込んでいるにすぎない。

現実的に考えれば、貴き上の人間が下賤な怪しい一般人に会ってもらえるはずが無いのだ。

ふと、横に並んで歩いていた朋美の姿がないことに気がついた。辺りを見回してみると後ろの方で転んでおり、男の人に助け起こされているのが見える。

明菜は考えに耽っていて気がついていないのか、どんどん先に行ってしまう。

僕は目的地が決まっていることで直ぐに追いつけると判断して、

朋美を迎えに足を向けた。

朋美を助けている人物には見覚えがあった。白峰だ。

側にお姫様がいらっしゃる様子を見ると悪運は強そう、勇者としての補正が効いていそう。だが、目の前の朋美の姿には気づかなかったらしい。

朋美を普通に立たせてやると白い歯を浮かべながら笑いかけている。――後ろのお姫様の嫉妬に狂った般若の面が無ければ心温まる光景だ。

彼が気がつかないのも無理はない。今の彼女の姿はネコミミ幼女メイドで、解れという方が可笑しい。

解ったらそれこそ勇者補正のアイノチカラを疑う。

どうやら普通にぶつかって別れることができるらしく、朋美が白峰に頭を下げて僕の方に駆け寄ってきた。

僕は一般人の兄妹を装うために白峰に軽く会釈し、朋美の手を取って明菜を追い掛けた。

それにしても明菜が先に行ってくれて本当に良かった。

変装のしていない彼女がいたら話がこじれるところであった。

僕のことは覚えていないだろうから良いけど、明菜が居たら面倒臭いことになっていただろう。

明菜は公爵の屋敷前で待っていてくれた。

彼女は僕らがいなくて不安そうな顔をしていてオロオロしていたが、僕を見つけると喜びで満面の笑みになり、近づくと一人にしたことを怒り始めた。その様子は元の世界とく異空間要塞サインで、凜とした立ち振る舞いで女の子を魅了していたとは思えない姿だ。

「何処へ行っていったんだ！ 心配したんだぞ！！」

「ごめん、ごめん。ちょっとトラブルがあつてね。それにしても、少し居なくなっただけで取り乱すとは、随分と寂しがり屋なんだな」

一人で困っていたところが可愛かったと、指摘してやると赤面して拗ねて、そっぽを向いてしまったしまった。

「ごめんね。でも本当に可愛かったんだよ？ 抱き締めちゃいたいぐらいに」

機嫌を直すように謝ると、今度は朋美が拗ねて脇腹を抓って来たので頭に手を置いてあやしてやる。

そんな僕らのイチャつきを見せつけられた門番達は渋面の顔になっていた。

「すみません。取り次ぎをお願いしたいのですが」

僕たちのやり取りに呆れた様子を見せていた門番に声を掛けた。こちらは平民で向こうは公爵付きである。なるべく低姿勢になつて悪い印象を払拭しなければならない。

袖の下を通そうかと思つたがやめておいた。規律が厳しい場合には逆効果になりかねないし、王都が壊滅して政情不安になっている時に犯罪に荷担するような行為は目をつけられる可能性があるからだ。

門番の二人も僕たちが声を掛けたことによつて緊張した雰囲気を放ってきている。

僕は明菜に目配せすると公爵令嬢に取り次いでもらうように交渉するよう促した。

まあねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさま
まだおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさま、おね
えさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおね
えさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまお
ねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまおねえさまあ
ああああ

おねええさまあゝもう一生離しません。ずうううううと一
緒です。死が二人を分かつまでお側にいます。愛してるなど安つば
い言葉は言いません。わたしの全てはお姉さまのものです。わたし
をじゆうにしてえええつつつ！！！！」

ダイビングアタックを慣行した幼女は、明菜を押し倒すとそのま
ま顔を胸元に埋めて、頭をグリグリしながら叫び続けた。

屋敷から慌てて追いかけてきた人たちも幼女の奇行に目を見張つ
て引いている。

一頻り叫び終えた幼女は、明菜の胸をまさぐり鼻息荒く堪能して、
首筋の臭いを嗅いで身体を痙攣させて悦に入つて逝っている。

――明菜には話を円滑にするため、人身御空になつてもらおう。
そう心に決めながら金髪ツインテールの幼女が気が済むまでほお
つて置くことにして、彼女を追つてきた屋敷の人達を観察すること
にした。

目を丸くしている先程幼女を呼びに行った門番と苦虫を潰したよ
うな顔をしている男装の双子の少女達、幼女の奇行に和んでいる侍
女らしき女性の四名だ。

双子の少女達は王城の図書室で明菜を呼びに来たときに見た覚え
がある。

たしか、髪を腰まで伸ばしているのが兄で短くショートカットに

しているのが妹だっけ？

あれっ？ 兄と言うことは男？

こっそりと双子のステータス画面で確認すると確かに髪の毛の長い方が男となっている。これが俗に言う男の娘なのだろうか？

まあ、他人の趣味にケチをつける真似はよくないよな。うん。もし、本人の趣味じゃなくて家族の強要であつたなら強く生きてもらいたい。

幼女の叫びが聞こえなくなつたと思つたら、恍惚の笑顔で寝に入つていました。

僕たちは屋敷の中に通された後、応接間で互いに自己紹介をした。明菜命な金髪ツインテールの変態幼女は、侍女さんにヒョイと小脇に抱えられて自室のベッドに御退場となっている。

目の前にいるのは双子の兄妹で、主に僕たちを應對しているのは兄のエリス・シリアス君だ。

「明菜様もご無事で何よりでした。

王都が壊滅的な状況と聞き、心配しておりました。ご無事で何よりでございます。

よろしければ王都で何があつたのかお訊きしたいと思っております。

それと、四日前からこの街に白峰様も居らしてますけど、お逢いになりますか？」

「彼女は王都でのことを理解しきっていないと思う。

他者の視点から見ると、王都に封印された魔物が暴れて、混乱のどさくさに紛れて彼女を亡きものにしようとした。

なぜ殺そうとしなかったのか解らないけど、彼女は奴隷商に引き取られ、僕に助けられて身を隠していた。

僕達が王都を離れてから王都の女奴隷達が居なくなって王城が崩落した。

白峰とは先程擦れ違ったけど、お姫様と楽しくしていたので気が引けるから止めておくよ。馬に蹴られて死にたくないし。

白峰もこの屋敷に泊まっているんじゃないのか？」

明菜が僕に助け船を出して欲しそうに目で合図してきたので僕が質問に答えた。

エリス君は単なる付き人として見ていた僕に会話を託されたのを見て不快な顔をしている。

「いえ、仮にも王家と公爵家は王都が壊滅する前までは政敵同士でしたので、当屋敷には泊まらず街の宿屋に泊まっているようです」

白峰と屋敷の中で鉢合わせする可能性が低くなったことに安堵する。

それにしても同じ国の中とはいえ政敵に助けを求めるか？ 普通だったら近くの政敵よりも遠くの味方を頼るものなのだが？

僕の感性が可笑しいのか、お姫様と白峰の感性が狂っているのか。常識が違うのだろうか？ それとも、何か企みがあるのだろうか？ 考えてみても妄想の域を出ないと考えて、静まった室内を払拭するために軽く冗談を飛ばす。

「白峰に彼女達を会わせると孕ませられるかもしれないから彼が来たら教えてくれ、チヨイト雲隠れするから。」

それとこの屋敷の主人クルスラスク公爵様にお目通りが叶うように取り計らってもらえないか？

「この街の食料事情を解決する商談があると言ってもらえれば会ってくれると思うけど」

「公爵様に会うには時間が掛かるかもしれません。お忙しい方ですから」

「構わないよ。お嬢様が明菜を離すまで此処に居るつもりだから。

「ー下手すると永遠に此処に居る羽目になるかもしれないけど・・・」

「冗談にならない冗談を言って笑い（苦笑）を取ると、僕らは取り止めない話をしながら歓談を進めた。」

16 公爵領（後書き）

入力がうまくいかないorz

17 公爵家（前書き）

夏風邪ひいた

17 公爵家

「ああ。お姉さまと食事を共に出来るなんてなんて幸せなんですよー！！！！」

金髪ツインテールの変態少女シャルビアー・ド・クルスラスク様が起きてこられたので夕食に招待された。

正直言つて<隷従の首輪>にそっくりの<戦乙女の首輪>をつけた明菜とその付属の僕たちに対する視線は冷たい。

主の娘が大事にしている奴隷とその主である僕は、本来招かねざる客であつて屋敷の主人と食事など出来る立場ではないのだ。

そう、僕らはクルスラスク公と一緒に食事をしている。

愛娘のシャルビアー嬢との久しぶりの夕食に便乗させてもらったのだ。

「ルイナーク様。いくらでお姉さまを売ってくださる？」

「グッ」

いきなりの言葉に吹き出しそうになつた。

まじまじと顔を見ると真剣な表情で戯言ザレコトを言っている可能性はなさそうだ。

公爵に視線を送るとニコニコと笑っている。

それで良いのかバカ親。あんたの娘は人間踏み外してるぞ。

僕と同じく狼狽した明菜がシャルビアー嬢に説明を求めた。

「とっ突然何を言い出すんだ」

「だって、お姉さまと一緒にならば、あのヒカルと添い遂げること

なつても、耐えることが出来ると思いますの。

お姉さま。わたくしとずつつと一緒に行ってください」

「あゝ残念ながら私の髪の毛一本、血の一滴までご主人様のものなんだ。だからシャルルの思いには答えてあげられないんだよ」

そう言つて明菜は僕を流し目で見て責任を押し付けてきた。

当然。シャルビアーは膨れっ面になり、ついでに明菜も不機嫌才一ラをたゆませている。

「シャルビアー様と白峰がご結婚なさるのですか？」

僕は話を躲すために、酒の肴にして状況を楽しんでいた公爵に問いかけた。

「うむ、王女殿下が王家と公爵家の確執を無くして国を纏め上げるには、勇者であるヒカル殿に嫁ぎ、両家の血筋を一緒にするのが一番良いと言つてきてな。返答を伸ばして保留中^{ホールド}にしているのだが、毎日毎日屋敷にやつて来ては同じことを囀^{オウズ}るのだよ」

本来なら推考するも値しない提案なのだろうが、現状の混迷している国の情勢を考えると無視できないものなんだろう。

だけど、王家側の貴族と手を結ぶことは、寄生虫を招き入れることになり、破滅を意味する。

それ故に、決断できずに先伸ばしにしているようだが、難民と国内の治安悪化で限界の時が近づいているのだろう。

僕たちがもう少し遅ければシャルビアー様は白峰の元に嫁ぐことを決断していたに違いない。

ならば今が押し時だ。

「単刀直入に言いますと、我々ルイナーク商会はシャルビアー様を担保に、この街の食料一年分を用意することができます」

突然の申し出に皆が目を丸くして僕を見つめてきた。

言い方が不味いのは分かっているので、顔を赤くするか青くする前にたたみ込む。

「この話のメリットはシャルビアー様と白峰が結婚しなくてよいこと、シャルビアー様と明菜が一緒にいられること、公爵様が民衆のために娘を差し出したと人気をとれることですね。もちろん、シャルビアー様には手出しせずにお戻しします。期間の長い留学と考えていただければ結構です」

案の定、周りの人達は顔を赤くしたり青くしたりして抗議している。だが、公爵様は鋭い目でこちらを見るだけで何も言わない。

「まず、貴族の娘として望まれない結婚は世の常ですが、シャルビアー様のことを思えば王女殿下の申し出は断るべきでしょう。しかしながら現在の状況では断るのは難しい」

国内の混乱とか街の閉塞感の打破とかを考えれば、トップが纏まって行動を一つにするのが一番である。

「ですが、この街に住む人の食料一年分が手にはいる可能性があるとするばどうでしょう？」

得たいの知れない商人ですが、シャルビアー様の身柄と引き換えに食料と交換されたと言えば、現状を知る王女側も何も言えないでしょう。

食料があれば民衆をコントロールして増兵することも容易です。そうすれば国内で覇を唱えるのも容易になるでしょう。

シャルビア様と食料の交換と申しましたが、別の名目でも結構です。様は王女殿下の手の届かない場所にシャルビア様を保護することが目的ですから。

シャルビア様を保護する場所は、僕以外には女性しかいない場所なので、取り戻すまでの安全は約束いたします」

僕の説明に室内が静かになる。

たかが商人が口にして良いことを越えているのは判っているが、食料を売り込むチャンスで、対価になりそうなのがシャルビア様なのだからしかたない。

これが断れられれば、商人組合にいつている人たちが奮闘して食料が多く回ることを期待し、シャルビア様には可愛そうだけど白峰のエサになってもらい、僕たちは引き上げるしかないだろう。

お姫様たちと商売をする気はないのだから………

「いくつか問題があるな。

果たしてそれだけの量の食料を本当に用意できるのか。それとシャルビアが行く場所が本当に安全なのか。

君の素性が得体の知れないことだな」

ようは信用がないということだ。

当然だろう。突然できた新設の商會が、何の実績も無しに公爵家に売り込もうとしているのだから信用しろと言う方が可笑しい。

「僕の素性は明かせないので悪魔の使いとでも思ってください。ただ、王都からの避難民に心を痛めていると言うのは本当です。それだけは疑わないでください。

シャルビア様が預かる場所の評価は、一度下見をしてからで構いません。

食料はご注文される半分を倉庫に入れてから契約するというのは

いかがでしょうか？」

僕の真剣な眼差しに感じ取ってくれたのか、公爵様は提案を了承してくれた。

僕の真の目的は食料という善意の押し付けである。とりあえず目的が達成しそうなことに安堵した。

翌日、倉庫に大量の食料を積み上げると話しはトントン拍子に進んだ。

シャルビリアの下見も、見たことのない技術を学ぶという新たな目的を掲げる切っ掛けとなった。

驚いたのは公爵様がシャルビリアを奴隷としてこちらに渡すと言い出したときだ。

何でも、お姫様の追求を逃れるにはこのくらいしなければならぬ。と言っていたから思い切ったものである。

ただし、キズモノにしたら買い取るように。と逆に売りつけられたのは困ったことだ。

――この時までには順調に話が進んでいた。

「これでお姉さまと一緒にいられるのですね！」

シャルビリアが明菜に抱きついて喜びを表現していた。ついでに朋美が僕に引っ付いてきた。

明菜とシャルビリアが抱きついてるのはわかるけど、何で朋美が僕に？

「最近ご無沙汰なので可愛がってください」

朋美のかまっつて攻撃を躲そうと助けを求めるが、明菜はすでにシャルビリアの愛撫攻撃にダウン寸前だ。

僕達四人しか部屋に居なくて、助けを求めることもできない状況に焦りが募るが、ふと、屋敷の外が煩いことに気がついた。

現在僕達が居る場所はシャルビリア様の自室だ。この場所は屋敷の二階にあり、外の様子が一望できる場所である。だが、決して街の通りに近いわけでもなく、街の喧騒が届かないように距離と工夫がされていた。

それが、ここまで音が聞こえてくると言うことは尋常では無いということだ。

真剣に外の音の様子を伺っているのに気づいたのか、朋美は上目使いで抱きついたまま身じろぎ一つ起こさない。

明菜の様子はベッドの上でシャルビリアの攻撃に晒されて、桃色吐息の百合空間に突入している。

正直いつてこのまま見ていたいが、外の様子からすると退っ引きならぬ状況だろう。

僕はシャルビリアに恨まれることを覚悟で心を鬼にして止めようとした。

「お嬢様!!」

突然部屋の扉が開け放たれてシリアス兄妹が部屋に入ってきた。

「王女様が王城の騎士を率いて屋敷を明け渡すように言ってきました!
た!

ここは危険です! さあ早くお逃げください!!」

兄の方が明菜を押し倒していたシャルビリアを引き起こし、小さい身体を腕の中に引き入れて、無理矢理部屋の外に出そうとした。

「ちょっと待て？ 安全だったら僕の城の方が良いよ？」

「うるさい！ とつとつと、一緒に来ればいいんだ！！」

僕の指摘に妹の方が突然キレて剣を抜いた。

訳がわからないが、分かるのは彼等が僕に敵意を持って、一緒に行くのは危険だと言うこと。こちらが行動を起こすときにシャルビニアを人質に取られてしまうこと。話し合うのは時間稼ぎになるが根本的な解決にならないこと。

話し合っても聞く耳持たなければ、逆に警戒を促し、不意打ちの機会が失われてしまう。

ならば、先手必勝で、今すぐ行動を起こす。

<対象、目の前の二人、四肢の麻痺>

左腕の中の世界アースフイク・クリスタルの意思を起動させて、双子を動けなくする。

双子の隙を付いてシャルビニアを引っ張り込み、呆けている明菜の上に投げ飛ばすと、二人を<異空間要塞ザイン>の僕のベッドの上に転移させる。

僕の突然の凶行に双子は言葉も出ないようだ。朋美は僕の前に出て戦闘体制をとっているのに情けない。小さい子に守られている僕の方が情けないけど……

シャルビニアに対する対応は多少強引だったかもしれないけど、相手の不意を付いて壊れ物シャルビニアを無事、戦闘圏外に避難させたんだから文句はないだろう。この場で使えそうにない明菜付きで二人きりにしたんだから感謝して貰いたいぐらいだ。

「ルイナーク様聞こえますか？ 無事ですか？」

街で商談を任せている少女から連絡が入った。向こうでも何か変

化があつたのだろうか？

「ああ、聞こえている。無事だ。そちらの状況は？」

『こちらは、兵が職業会館を占拠する前に建物を出たので無事です。公爵家に兵が向かったと聞いて連絡いたしました』

「こちらは一旦<ザイン>に戻る。

そちらはできる限り情報収集してくれ。身の危険を感じたらすぐに戻るように」

『わかりました』

了承の言葉の後に通信が切れた。

職業会館を乗つると言うことは本格的なクーデターかもしれない。巻き込まれる前に屋敷から出た方が良さそうだ。

「お前さえいなければ！」

妹のアリス・シリアスが遠吠えをしている。

そう言えば彼女達の目的を聞いてなかったけど、僕に敵害心を持ってシャルビータを連れ出そうとしたということは、彼女達は向こうのスパイでシャルビータを人質に採ろうとしたのだろうか？

「誰に命令されたか知らないけど随分と卑劣な奴だね」

「ヒカル様は全てにおいて正しいんだ！

お前なんか公爵家に取り入って、ヒカル様の邪魔しなければこんなことをしなかった！

シャルビータ様はヒカル様と一緒にいる方が幸せになれるんだ！

！

簡単に誰が黒幕か喋ってくれた。

そうか、白峰の奴か。あいつらがこの町に来た理由は公爵家を乗っ取るつもりだったんだな。

だけど、僕達が余計なことをしたから強行手段に訴えたのか？

いや、兵の数から言って初めからそのつもりだったのかもかもしれない。彼女達を裏切らせていることから後者の方が高そうだ。

でも、妹の方は精神汚染されたのは分かるけど、兄の方は？ 後ろの穴でも奪われたのか？

聞いてみると妹に付きあったそうさ。頭の中が白峰菌に増殖された妹を人質に採られたんだらう。

従うしかなかった悲哀を感じられる。

さて、彼等の処置だけど、妹は汚染されているから殺すにしても兄は殺すほどではない。だが、妹を殺せば兄は復讐しに来るだらう。かといって両方放置すれば僕達の情報が流れる。

ということ、兄妹には死んでもらうことにした。

苦しまず、証拠が残らないように一瞬で塵に変える。

屋敷内に争う音や悲鳴が響いている。どうやら強硬突破するらしい。嫌に拙速だ。時間に追われているのか？

人、二人分の塵が空气中に消えるのを見送ってから、朋美を抱き抱えてくざイン>に帰った。

後日、クルスラスク公爵は、領民が食料難に喘いでいるのに大量の食料を隠し持っていたとして、勇者ヒカルの名において断罪され、倉庫にあった大量の食料は放出された。

この事により、勇者ヒカルは公爵領の難民の支持を得ることに成功し、周辺の門閥貴族と手を組んで公爵領を平定する。

地盤を持った勇者ヒカルは国の平定に乗り出し、バラバラになつた国をまとめあげた。

そして、勇者ヒカルはオルスターン神聖王国を滅亡の危機から救つた英雄として民衆の支持を得ることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022r/>

僕は巻き込まれた一般人

2011年8月20日07時15分発行